

第5章

## ディスカッション活動・事後活動セッション



## 1 ディスカッション活動・事後活動セッションの概要

### (1) 目的

ディスカッション活動は、(1) 各国における様々な分野の実情について理解を深め、各分野の課題解決のための活動への意欲を高めるとともに、(2) 率直かつ活発な意見交換を通じ、(2-a) 相互理解の促進、(2-b) 集団の中での意見のやり取りをする能力の向上、及び(2-c) 人前でのプレゼンテーション能力の向上を図ることを目的として実施するものである。

さらに、ディスカッション活動の成果を活かして、事後活動（事業終了後の社会活動）を行う際に必要な具体的な知識やスキルを身に付けさせるとともに、参加青年（PY）に具体的な事後活動案を考えさせ、積極的な参加を促すことを目的として実施するものである。

事後活動セッションは、各国事後活動組織及びその連携組織であるSSEAYPインターナショナルについての理解を深めさせること、また、自分たちが考えた活動案を事後活動で実現させるために、より具体的な企画・立案を行うことを目的として実施するものである。

### (2) テーマ

本年度のディスカッション活動・事後活動セッションにおける共通テーマは「青年の社会活動への参加」とし、その下に8つのグループ・テーマを設けた。PYは、グループ・テーマごとに各国ほぼ同数のPYで構成されるディスカッション・グループ（DG）に分かれ、意見交換を行った。

#### a. 共通テーマ 「青年の社会活動への参加」

青年は、リーダーとして社会の活性化と発展に寄与することを期待されている。各参加国での青年の社会活動への参加の実情を理解し、様々な分野において青年が貢献し得る活動について討議することによって、青年自らが社会参加の重要性を再認識し、事後活動への意欲を高め、積極的な参加を促すことを目指す。

#### b. グループ・テーマ

- ① グローバル化の功罪
- ② 情報とメディア
- ③ 国際関係（日・ASEAN協力）
- ④ 長寿社会を生きる
- ⑤ 質の高い教育
- ⑥ レジリエントで持続可能な都市づくり
- ⑦ ソフト・パワーと青年の民間外交
- ⑧ 手頃で信頼でき持続可能なエネルギーの利用

### (3) 実施方法

#### a. ディスカッション活動

乗船前に、PYの希望に基づき、所属するDGを決定し

た。所属DGの決定後は、DGごとに担当ファシリテーターから事前課題が課せられた。PYは、ディスカッション活動への参加に当たり、各グループ・テーマに関する知識を深めるとともに、事前課題に取り組むなど必要な準備を行った。

日本国内活動では、ディスカッション活動への導入として、グループ・テーマに関連した課題別視察を実施した。

船内活動では、導入プログラムにおいて各国の具体的な社会活動事例の発表を行った後、DGごとに、ファシリテーターの指導を受けながらグループ・ディスカッションに参加した。各DGは、ファシリテーターがその運営を統括し、また、各DG及び各国で選出されたディスカッション活動運営委員がファシリテーターを補佐した。

ブルネイ訪問国活動では、グループ・ディスカッションの議論をより充実させるため、グループ・テーマに関連した課題別視察が設定された。PYは、課題別視察先において、活動を具体的に体験し訪問先の人々と交流する場を持つことにより、その分野における「青年の社会活動への参加」についての認識を深めた。

DGごとに5回のセッションを行った後、PYが事業終了後に社会活動を行う際に必要な、具体的な知識やスキルを学ぶことを目的とし、企画・実践に向けての取り組み方をファシリテーターから学ぶセッションを行った。その後、DG別にファシリテーターとディスカッション活動運営委員が進行役となり、ワークショップ形式により、具体的かつ実践的な事後活動の企画・立案の演習を行った。

各DGは、成果発表会において討議内容の成果発表を行うとともに、ディスカッション・レポートを作成した。

#### b. 事後活動セッション

事後活動セッションIでは、国別に各国事後活動組織代表者が進行役となり、各国事後活動組織の連携体であるSSEAYPインターナショナルについて紹介するとともに、その目的・活動状況についての理解を深め、PYのSSEAYPインターナショナルや各国事後活動組織の活動への積極的な参加を促した。併せて、過去のPYが事業中に発案したプロジェクトの、その後の実施状況及び成果を紹介し、PYがより具体的に事後活動をイメージできるようにした。また、各国における事後活動組織や過去のPYの活動状況や事例について理解を深めた。

事後活動セッションIIでは、国別にPYが事後活動として各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについて議論し、各国事後活動組織代表者のアドバイスを受けながらプロジェクト案の作成に取りかかり、帰国報告会に向けた発表の準備を行った。

### (4) ファシリテーター

ディスカッション・グループ	氏名	性別	国名
① グローバル化の功罪		男	英国
② 情報とメディア		女	タイ
③ 国際関係（日・ASEAN協力）		男	インドネシア
④ 長寿社会を生きる		男	オーストラリア
⑤ 質の高い教育		女	日本
⑥ レジリエントで持続可能な都市づくり		男	インドネシア
⑦ ソフト・パワーと青年の民間外交		男	フィリピン
⑧ 手頃で信頼でき持続可能なエネルギーの利用		男	ブルネイ

### (5) 各国事後活動組織代表者

国名	氏名	性別	事業参加年
日本		男	2016
ブルネイ		女	2016
フィリピン		男	1994
タイ		女	2010
ベトナム		女	2014
カンボジア		男	2012
インドネシア		男	2011
ラオス		男	2014
マレーシア		男	2002
ミャンマー		女	2000
シンガポール		男	2012



各国事後活動組織代表者による福田正信内閣府青年国際交流担当室長敬訪問（12月13日）

## (6) プログラムの流れ

乗船前		PYの希望に基づき、所属グループを決定 PYは各国にて事前課題等の準備
日本国内活動	10月29日 19:45～21:00 10月30日	グループ別ミーティング (ディスカッション活動運営委員の選出) グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション 活動	11月3日 11:30～12:45 14:15～17:00 11月4日 10:00～12:45	ディスカッション活動運営委員会 (ディスカッション活動の運営方法の協議、導入プログラムの準備)
	11月5日 14:15～17:00	導入プログラム (ディスカッション活動の主旨・実施方法等の説明、 共通テーマに基づいた各国の社会活動事例発表)
	11月6日 14:15～17:00 11月7日 10:00～12:45 11月8日 10:00～12:45 11月9日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションI グループ・ディスカッションII グループ・ディスカッションIII グループ・ディスカッションIV
ブルネイ 訪問国活動	11月10日	グループ・テーマに関連した課題別視察を実施
船内 ディスカッション 活動	11月15日 10:00～12:45	グループ・ディスカッションV
	11月16日 10:00～12:45 14:15～17:00	事後活動の企画・実践に向けての導入 事後活動の企画・実践に向けたワークショップ
	11月22日 10:00～12:45 14:15～17:00	まとめ ディスカッション活動運営委員会
	11月23日 10:00～12:45	成果発表会の準備・DG毎のレポート作成
	11月29日 10:00～17:00	成果発表会
	11月30日 10:00～12:45	自己評価
船内 事後活動 セッション	12月8日 10:00～12:45	I (国別) (SSEAYPインターナショナル及び各国事後活動組織の活動事例紹介、 既参加青年による活動の紹介)
	12月10日 10:00～12:45	II (国別) (各国で取り組んでみたいことやプロジェクトについての議論及びプロジェ クト案の作成、帰国報告会での発表準備)
	12月12日 16:00～17:30	帰国報告会 (国別にプロジェクト案の発表)

## 2 ディスカッション活動・各グループのレポート

## (1) グローバル化の功罪グループ

PY: 42名

## A. グループ・テーマ・インフォメーション

## a. テーマの概要

グローバル化は我々の生活の、ありとあらゆる面に影響している。世界がより小さくなり、新しい考えや規範、異文化がより身近になるにつれ、21世紀のグローバル化はASEANの青年に対して特有な普遍的な課題をもたらしている。より平等なASEANを可能とするようなグローバル化への対峙を、志の高い未来のリーダーとして、どう確実にすることができるだろうか。このDGでは世界の発展によって我々が直面している様々な社会的課題や、それらの因果関係や解決方法について我々が見識を広げる余地について検討する。理想的な社会の将来像を実現するための方策や、次代を担う存在である青年がいかにグローバル化へ対峙するべきかについて考える。

## b. 期待される成果

- グローバル化が我々の生活に及ぼす様々な影響の仕方について学ぶ。これは、経済的なものだけでなく、社会的また文化的な影響も含む。
- ジェンダーやフェアトレード、移民といったテーマがグローバル化の理論にどう関係するかについての概要を掴む。

## c. 身につく能力

## 知識

- 課題や利点を含めた、グローバル化の社会的効果や地場の社会・文化への影響についてより意識的になる。
- グローバル化について分野横断的な理解を深める。

## スキル

- グローバル化の複雑さについて議論することにより、批判的思考力を培う。
- グループ活動を通じて、チームビルディング、意見の異なる他者との問題解決、実践的なプレゼンテーション、といった能力を涵養する。

## 行動

- 文化的に慎重に扱うべき、また、多様な議論に与ることができる。
- 他者のもの見方を尊重・理解し、共通の解決法を見出すことができる。

## B. 事前課題

## 個人課題

## グローバル化の定義

グローバル化とは何か、またその結果今日の世界はどのように進展したかを誰かに質問すること。例えば、両親、兄弟、先生、友達等、こうした質問をするのに自分が面白そうだと思う相手であれば誰でも構わない。本課題は、グローバル化が個人的な経験となり得るのか、また、それが一般化できるのかを確かめることが目的である。

## 国別課題

## a. 地球市民 (グローバル・シチズン)

地球市民になるとは、どういうことか、創意に富んだ解釈を提示すること。発表する題材は一つに限らなくともよいが、全体で約6分の発表に収めること。

## b. ジェンダーとグローバル化

経済活動への参加における男女差を縮める自国での政策や取組を3つ見つけること。それらに加え、自国における状況の初歩的調査として以下の副題について含めること。

自国における女性の経済活動への参加について (例: 労働人口の男女比、ある業界において女性が占める割合が過剰もしくは過少か)

女性にとってある業界やキャリアを歩もうとする際によくある障壁がもしあれば紹介すること。

## C. 活動内容

## 日本での課題別視察

施設: 独立行政法人日本貿易振興機構 (JETRO)

## 活動

- JETROの制度や目的についての紹介
- ASEAN各国や日本の輸出入についての議論

## 視察から学んだこと

- 経済的観点からは、各国が必要な製品を輸入し、また品質の高い製品を輸出する機会をグローバル化は切り拓いてくれる。
- しかしながら、グローバル化時代では、中小企業は弱い立場に置かれる。

施設: 特定非営利活動法人開発教育協会 (DEAR)

## 活動

DEARの紹介

ワークショップ: 「もし世界が100人の村だったら」

#### 視察から学んだこと

- グローバル化は文化的・社会的観点からはいくつかの課題を引き起こし得ることを学んだ。参加型のワークショップにより、広がり続ける貧富の差や過剰人口などの主要問題への理解を得た。
- ASEAN各国及び日本における未来のリーダーとして、これらの課題を十分に認識し、短期及び長期の解決法を見出すために協働する必要がある。

#### グループ・ディスカッションI: グローバル化を定義する

##### ねらい

- 議論の火蓋を切り、21世紀のグローバル化が持つ社会的諸相に関する多様な視点を体得する。
- 様々な現場や研究においてグローバル化がどのように定義されているかを理解する。

##### 活動

- 個人課題を用いて、今日の世の中がいかにグローバル化されたか話し合いを始めた。PYは、友人、家族、教授や同僚を含めた様々な対象への聞き取りを行っており、これにより、個人々の持つ背景次第でいかにグローバル化が広く解釈され得るかについて、PY間で議論が展開された。
- その後、グローバル化は多面的なつながりをはらむ広義な言葉であると認識し、これにより、もっと限定的な枠内に我々の焦点を絞るに至った。具体的には、グローバル化の社会的諸相（仕事や健康、教育など、我々の日常生活に関する面）である。国際連合やEU、ASEANなどの要素を踏まえ、世界規模でどのように社会的な変化が起こってきたかが主要な問いとなった。
- より焦点を絞り、班ごとにグローバル化の異なる定義を目にした。PYは所与の定義に賛成するか反対するか、もしくは自分たちで新しく作り出すかを決めなければならず、このように広義な言葉を定義するに当たって、その意味する深度や微妙な差異につき考えるため、広範に及ぶ定義例を取り扱った。

##### 成果

- 今後の議論の方向や射程を固めるため、つまり社会的諸相を踏まえてグローバル化をどのように論じ得るか、について話し合った。
- グローバル化の社会的諸相に関する議論に資する広範な視点について理解した。

#### グループ・ディスカッションII: グローバル化と移民の動向

##### ねらい

- 世界中の移民の動向について議論を始め、これからのグローバル化と移民についての感覚を探る。
- より開かれた、国境なきASEANに向けて障害となり

得る世界的な課題について考える。

##### 活動

- グローバル化がいかに移民動向へ影響するかを考察した2つの学説について理解した。サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』について考察し、フランシス・フクヤマの『歴史の終わり』と対比した。PYは2つの班に分かれて、いずれかの立場からの討論を行い、グローバル化と移民の関係性についての多くの相反する見方を検討した。
- これに続いて、ASEAN以外の動向を見て、自国における議論に当てはめたり比較したりするため、事例研究として英国のEU離脱を取り扱った。
- この事例研究の後、議論の俎上に載った課題について取り組むため、PYは各自で国家を想定し、自らが望む移民政策について、労働、産業、資源などの側面を交えて検討した。

##### 成果

- 現状の移民動向からくる主要な社会的課題について理解を深めた。
- グローバル化の未来について主要な学説につき検討した。
- (英国のEU離脱を取り扱うことで) グローバル化と移民について、ASEANを超えた議論に、より意識を向けることができた。

#### グループ・ディスカッションIII: グローバル化と貿易の平等性

##### ねらい

- グローバル化の過程を経た越境取引の持つ社会的影響を検証する。
- より公平で開かれた国家間の貿易を目指す際の社会的課題について考察する。

##### 活動

- グローバル化に関し公平な貿易の重要性を考えることのできる題材として「社会的持続可能性」という語句の定義を行った。
- PYはロールプレイの一環として、カカオ豆農家、チョコレート会社、小売企業と消費者の4つの班に分かれ、各班ともに国際的な貿易の過程における自らの役割や交渉力、影響力について考察した。
- ロールプレイの後、弱い立場にある労働者への搾取や、地場産業と多国籍企業の対立といった問題を検討することで、PYは不公平な貿易を物語る事実や統計について知見を得た。

##### 成果

増え続ける通商に関するASEAN内外の政策に起因する、主な社会的課題について理解を深めた。

#### グループ・ディスカッションIV: ジェンダーとグローバル化

##### ねらい

グローバル化した市場やASEANにおける機会を踏まえ、経済活動への女性参加について理解を深める。

##### 活動

- 自国でのジェンダーに関する個人的な経験を共有し、我々の機会や生活にどう影響を及ぼしているのか考察した。
- 班別行動を通じて、ジェンダーに関する個人的な経験についての考察を得て、どのようにして複雑に絡み合いグローバル化した市場への経済的・社会的参加の決定要因となるか理解した。
- このセッションにおいて、経済格差を縮小するための自国における政策や取組を3つ調べるという国別課題が実を結んだ。PYは参加国ごとの2か国1班に分かれ、政策の比較検討を行った。その後、共通点と相違点が何であったかを共有した。
- 最後に、ASEANや日本において、ジェンダーの観点からより公平なグローバル化の進展のためには何が達成されるべきかにつき重要な事実や統計データを概観した。

##### 成果

ASEAN内外における女性の生計手段や機会に関する通商政策の増加に起因する社会的課題について考察を深めることができた。

#### ブルネイでの課題別視察

施設: ブルネイ・ダルサラーム大学リーダーシップ・イノベーション研究所 (ILIA)

##### 活動

厚い講師層から選ばれた2名の著名な教授による講義

##### 視察から学んだこと

- 「外資を入れることは異文化を入れること」であり、経済のグローバル化がもたらす影響は、国家の文化背景とも深く関係する。
- ある利害関係者がその他の利害関係者から利益を得る過程を説明する「レント・シーキング」という言葉にPYのほとんどが関心を寄せた。

#### グループ・ディスカッションV: 総括

##### ねらい

DGとしての一致した見解を形成すべく、これまでのセッションのまとめを行う。

##### 活動

- 過去のごとに担当班をつくって、各回の学びをまとめるため4班に分かれた。そして各自のまとめを発表することで、これまでの流れや組立、学びをおさらいした。
- 国別課題「地球市民になるとはどういうことか」の

発表。パフォーマンス、ビデオ、ロールプレイなど創意に富んだ様々な形で行われた。

##### 成果

- 自分たちの学びをまとめ上げ、様々なテーマ同士を一つに結び付けた。
- 全ての課題の発表が完結した。

#### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

##### ねらい

事後活動の案出しをするに際し、DGで得たスキルや知識を使う。

##### 活動

国混成の4班に分かれ、DGに属する社会問題に関するテーマを班ごとに一つ取り扱い、それぞれ対応するプロジェクトを企画した。

##### 成果

- 4班の内2つにおいて、PYはDGで挙がった社会問題に直接関係するプロジェクトを企画した。他には、乗船中に実施するものや、機会が極めて限られている地方の若者の育成に関するプロジェクトがあった。
- 事後活動案を取り扱う上で、PYはプロジェクト・マネジメントの理論を具体的な企画案に落とし込むことで、プロジェクト・マネジメントという概念の基礎をより体得することができた。

#### D. 決意・期待される今後の活動

「グローバル化とは中立的で継続的な営みであり、我々が次世代にバトンを渡した後もなお、続いていくものだ。それゆえ、5回のセッションから答えを出すよりも、より良い未来を実現するための施策に必要な情報を更に身に付ける。また、各セッションで明らかとなった問題に対するプロジェクトが複数考案された。より公平で自由な取引のためのプロジェクト、ジェンダー格差縮小の効果を小学生に啓蒙するプロジェクト、海外での就労者の抱える問題を解決するプロジェクト等である。」

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

「グローバル化の功罪」は、幅の広い題材であり、また経済やビジネスに焦点を当てるだろうという印象を与えたため、多くのPYにとって第一希望ではなかった。しかしながら、回を重ねることで、PYは社会的諸相というテーマの下でグローバル化の異なる面を目指す機会を得ることができた。グローバル化は大きな現象であるという事実は我々全員が認識しているところであるが、社会的諸相から眺めてみることで、我々の日常生活へどう影響し、社会的・文化的文脈ではどのような意味をはらむのかを議論した。

移民については、外国に新しい機会を労働者が見出す

機会を増やすであろうが、一方で国民意識や国民の一体感を損ない、有効な移民政策を持たない国では政治問題を引き起こしかねない。英国のEU離脱では、グローバル化時代における移民に対して世の中がどのように反応しているかを目の当たりにすることができる。PYは「外資を入れることは異文化を入れること」とあるとおり、自らの価値観や伝統、そして経済を守ろうとする国家に対してこのような時流がどう反映されているのか議論した。こうして、文化や伝統を保ちながらもグローバルな経済発展のバランスをとるための方策を、未来のリーダーとしては見出さなければならないと認識するに至ったのである。

自由貿易の公平さについては、どの国家もグローバル化の恩恵を受けて自国製品と文化を推し広げようとするが、先進国と開発途上国との間には不公正さが横たわっている。我々の課題別視察では、立場の強い者が弱い者から利するプロセスとして「レント・シーキング」という言葉が参照され、DGにおいて、この言葉は様々な題材に対して当てはめられた。自由貿易は多くの国々において促進されており、特にASEANではASEAN自由貿易地域という枠組みで行われている。しかし、この存在を見聞きしたことがないという者の数はいまだに非常に多いのだ。さらに、以前にも増した経済活動への参加についても、確かにグローバル化はより多くの機会を両性に対して生み出しているが、その参加度合や給与における格差が依然として残っている。これは、最初の段階で女性の方が男性より悪条件から始まるという事実起因しており、我々が議論した社会的障壁により女性の機会は限定的となっている。

グローバル化とは、国家や人々がより一層繋がるプロセスであるが、一部には経済的に弱い立場の者も存在している。グローバル化の恩恵を伸ばし、欠点を最小化するにはどうしたら良いかより深く考えるにあたって、このプロセスがもたらす社会的課題について理解することは肝要である。

#### F. ファシリテーター所感

このテーマでは、グローバル化の「社会的諸相」という特定のレンズを通して物事を考察してきた。具体的には、このグローバル化というプロセスが、労働、健康、教育を含む人々の生活にどう影響し、グローバル化とはどこまで公正で公平なものとなり得るかという疑問が投げかけられた。参加者の背景は多様であり、範囲外の事柄への興味関心を持ちながらも、より特定の枠組みを用いてPYは予定された活動に対し創造的、積極的に活発に取り組んだ。

概念や理論を紹介する題材への導入説明に始まり、続いてPYの考えが活きるよう小さな班ごとの活動を行うという形でほとんどの回が進められた。活動の内容に

よって、PYは自らの学びを色々な形で発表し、創意工夫を凝らしてロールプレイや物語形式にすることもあれば、より形式ばったプレゼンテーションやディベートをすることもあった。ファシリテーターとして個人的には、PYの多様な才能やスキル、そしてかようにも幅広い視点を携えて異なるグループでどう協働し、結論をまとめ上げて発表するかを目にすることができた。

概して、第一希望としてこのテーマを選んだPYとそうでない者の間には、はっきりした差があるように思えた。しかしながら、興味関心や背景にかかわらず、多くのPYが題材に関して互いの国で共通する問題や課題を出しあうことができ、そしてプロジェクト・マネジメント・ワークショップにおいてはDGに関係するプロジェクトを考え出すことができた。こうしたことから、高い参加度合いを感じることができ、PYは目に見える問題に対して詳しく論じて創造的な解決策を考え出すことができた。PYは国別でなくDGで扱った特定のテーマに関心を寄せるグループごとに、プロジェクトを企画した。これは、帰国に続く事後活動の前に、多様な環境下で、国境に縛られず知識を共有するプロジェクト・マネジメントの基本にPYが向き合うことを企図してのことだった。

ディスカッション活動運営委員会の委員を支えるべく、他のPYも貢献してくれた。例えば、国ごとに代表者が毎回の学びについて共有することで報告書作りに役立ち、その後の手順を明確化する手助けとなった。この他にも、PYは何名かごとに声を掛け合って自発的に議事録を作成したり、毎回の機材設置を手伝ったりしてくれた。こうした働きを通じてDGにおける協調性が増していった。将来のファシリテーターに対しては、DGをできる限り盛り上げて、PYが色々な形で自らの考えを発表できる十分な機会を生み出すことを勧めたい。

私のDGにおける最大の収穫とは、11か国から集まった経験や知識が束となって、話題に上がった多くの社会的課題に対する新しい視点を創り上げたことである。

全ての訪問国に対し、我々を歓迎していただき、また課題別視察を手配していただき感謝申し上げます。こうした訪問は、PYに対して、また違った学びの機会と地元青年との交流をもたらしてくれたという意味において価値あるものだった。将来的には、ファシリテーターが課題別視察と更に深く連携できるのが好ましいだろう。こうした連携が、PYにより良い経験と、よりDGのテーマに関係した内容の議論をもたらすことを望んでいる。

PYの全員から、私は多くのことを学んだ。そして各国についての他では得られないだろう理解を得ることができた。このように、私は今回の機会に深く感謝しており、DGにおいて互いに優しく支え合い、また活力をもたらしてくれた全員に対し、御礼申し上げます。

内閣府及び管理部門に対しては、この事業期間を通して、業務を円滑に行えるようご尽力いただき、また単に

お膳立するだけでなく我々に対して耳を傾け、心配事を真摯に受け止めるなど、常に伴走いただき、感謝の意を表したい。DGが円滑に運営されるための舞台裏での働きぶりは素晴らしい、特筆に値する。申し訳ないことにファシリテーターとして至らない点もあったであろうが、若きリーダーたちを育てるべく「東南アジア青年の



## (2) 情報とメディアグループ

PY：41名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの概要

今日における情報とメディアの社会的影響を理解する。続いて、情報の送り手としてメッセージを伝達する際、いかに積極的かつ効果的にメディアを活用すべきか、また受け手としてもいかに注意深く情報を取捨選択すべきなのかについて議論する。

#### b. 期待される成果

- 情報とメディアについての概念を理解し、説明できるようになる。
  - 情報とメディアについての効果を理解し、説明できるようになる。
  - 情報・メディアリテラシーについて理解し、日常生活においてメディアリテラシーを扱える実践的な知識とスキルを身に付ける。
  - 団体や地域、社会におけるメディアリテラシーを倫理的、効果的、効率的に強化する具体的な実践的な解決法と戦略的なコミュニケーション・プランをまとめる。
- #### c. 身につく能力

#### 知識

- 情報とメディアについての知識と、変わりゆく世界においてそれが自身及び社会にもたらす効果
- ASEAN及び日本におけるメディアについての知識
- 情報・メディアリテラシーについての知識
- 成功裡に情報・メディアリテラシーの解決法を実行するための戦略的なコミュニケーション管理法につ

船」事業におけるディスカッション活動が続いていくことを祈念している。

第45回「東南アジア青年の船」事業の一員となれたことを実に幸運に思うとともに、将来のASEAN及び日本のリーダーたちと今後繋がることを楽しみにしている。



いての知識  
スキル

- 批判的思考に関するスキル
- メディアリテラシーに関するスキル
- 戦略的コミュニケーション管理に関するスキル
- 発表や説得などのコミュニケーションに関するスキル

#### 行動

- 目標・目的・自己意思をもって情報とメディアを消費・利用する。
- 情報とメディアについての手本となる。
- 対人スキルをリーダーシップや協働に昇華させる。

### B. 事前課題

#### 個人課題

- 日常生活におけるメディア利用に関する量的調査
- 日常生活におけるメディアリテラシーやメディア利用に関する質問への回答
- 新聞や雑誌の用意
- 課題図書（3本）
- テレビ番組もしくは映画の視聴
- 自撮り写真の用意

#### 国別課題

自国でのメディアに関するプレゼンテーションの用意

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：ヤフー株式会社

**活動**

- 概要説明
- オフィス視察
- ワークショップ
- ポスター発表

**視察から学んだこと**

日本におけるオンライン・メディアとヤフー株式会社を取り巻く状況、また日本で冠たるオンライン・プラットフォームであり続けられるゆえんたる獲得データや事実を使ってより良いサービスを提供するための5か年戦略と仕組みについて学んだ。他にも、新しいメディアの立ち上げやビジネス・マッチングに興味のある人にコワーキングスペースを提供したり、更には自然災害時の救援に自社のデータや技術ネットワークを活用した支援を行ったりする体制といった社会貢献活動についても学んだ。オフィス視察は受付エリアに限られたが、機密保持のためだった。またPYは日本企業の就業規則についても学んだ。ワークショップでは、船内でどのようなメディアを構築するかを議論した。

課題別視察での主な学びは次のとおりである。

- 日本におけるオンラインの概要について
- ヤフー株式会社の戦略的な経営
- ヤフー株式会社はオンラインのニュース・メディアとして様々な情報源からニュースを選別しており、最初は人工知能によって行われるものの、それでも最後は人の手によって行われていること。
- オフィス視察
- にっぽん丸でのメディア企画を構築するワークショップ

**グループ・ディスカッションI****日常生活における情報とメディア****ねらい**

- 情報とメディアに関する概念を理解する。
- PYの日常生活に見られる情報とメディアの様々な活用について理解する。
- 情報とメディアによる効果について認識する。

**活動**

- 概要説明
- 自国の紙媒体を携えた自己紹介
- グループ・ディスカッション
- ポスター発表

**成果**

ファシリテーターは導入説明を行い、DG2の目的や期待される成果について話をした。自国から持参した紙媒体を携えての一人15秒の自己紹介では、新しい友人についてだけでなく他国の異なるメディアについても知ることができた。次に、PYが情報とメディアについての基礎を理解できるように、メディアの発展、日常生活にお

けるメディアの役割、メディアがどのように機能し、社会がメディアに対してどのような働きかけをするか等、基本的な概念をファシリテーターは集中的に説明した。そして、PYは班に分かれて情報とメディアやそれらの効果についての自らの意見に関して議論し、発表を行った。その後、課題に基づいてメディアリテラシーについての意見交換を行い、続いて、PYたちの自国メディアから持ち寄ったニュースを用いたニュース掲示板を作成し、一つだけ偽のニュースを混ぜた。このニュース掲示板は船内2階ロビーに置かれた。

PYが情報とメディアについての概要を、その概念、日常生活における様々な活用例や効果を交えて理解したということが、議論を通して分かったのは大きな収穫だった。

**グループ・ディスカッションII****主流メディアの力****ねらい**

- 情報とメディアの類型や特性について理解する。
- 各国におけるメディア産業について知識を得る。
- メディアの有する力について理解する。
- メディアの責任や倫理について理解する。
- 情報・メディアリテラシーについての認識を持つ。

**活動**

- メディア利用に関する調査の報告発表
- 概要説明
- グループ・ディスカッション
- ロールプレイによる発表
- ポスター発表
- パワーポイント発表

**成果**

各国における情報の受け手から見たメディア消費について理解できるよう、ファシリテーターはPYに対してメディア利用に関する調査<sup>注1</sup>の報告発表を行った。更に、ファシリテーターの説明によって、主流メディア（印刷、放送）の基本的な考え方と、旧来的なメディアとデジタル・メディアの両方を通してニュースや広告・広報にどのように自らのコンテンツを盛り込んでいるのか、についてもPYは理解した。そしてPYは班に分かれて、説得的なコンテンツを作り上げるために広告・広報の内容について議論した（題材は新聞・雑誌からの引用）。この活動では、メディアの所有、企業体としてのメディア、そして責任と倫理にも関係してくるだろう複数メディアの所有について理解を深めることができ、その後は、各国ごとの発表により各国でのメディア産業の全体像を知ることができた。

議論による主な学びは次のとおりである。

- 情報とメディア、組織、所有、規制と倫理についての理解

- メディアには様々な説得のための戦術があることについての認識
- アジアと日本において、メディアの所有や管理、規制などメディアを取り巻く状況が異なること。しかしながら、旧来メディアの後退とデジタル・メディアの急成長という傾向については共通していること。

**グループ・ディスカッション III****メディア・コンテンツ・リテラシー****ねらい**

- メディア・コンテンツの概念とその効果について理解する。
- コンテンツ中における情報・メディアリテラシーに関する問題につき分析できるようになる。
- 情報・メディアリテラシーについて理解する。

**活動**

- 概要説明
- グループ・ディスカッション
- ロールプレイによる発表
- ポスター発表
- パワーポイント発表
- 映画鑑賞

**成果**

メディア・コンテンツの基本的な考え方についてファシリテーターによる概要説明があった後、PYはテレビ番組もしくは映画を視聴するという事前課題に基づいてメディア・コンテンツについての意見交換を行った。選んだ課題ごとに5つの班に分かれた後、各班ともにメディア・コンテンツとその効果に関して分かったことを発表し、それにはテレビ番組と映画に巧妙に盛り込まれている内容についてのPYの理解が表れていた。また、PYはメディアが受け手に対しての現実、イデオロギーや商業的価値を形作り得るということも理解した。最後に、メディアでどのような情報の伝達が行われるのかについて理解を深めるために映画を一緒に視聴し、メディアリテラシーを体得した。

議論による主な学びは次のとおりである。

- 異なる種類のメディア・コンテンツや効果についての理解
- メディアリテラシーへの更なる理解

**グループ・ディスカッションIV****デジタルな世の中におけるメディア及びメディアリテラシー****ねらい**

- デジタル・メディアの基本的な考え方や特質について理解する。
- 情報とデジタル・メディアリテラシーについて認識する。
- 情報・メディアリテラシーに関する問題につき分析

できるようになる。

**活動**

- 概要説明
- グループ・ディスカッション
- ロールプレイによる発表
- ポスター発表
- パワーポイント発表

**成果**

デジタル・メディアの多面的な効果について理解してもらうため、課題図書としてデジタル・メディアと子供、フェイクニュース、文化帝国主義についての3本の論文がPYに課せられたが、DGでは自らの関心ある題材に基づいて3班に分かれ、論文で示された状況や懸念に関し解決策はないか議論し、学んだことについて発表を行った。この課題と活動によって、PYはメディアの影響、効果、懸念点について認識をより強め、フェイクニュースの見分け方や子供を守る方法、グローバル化時代でのデジタル・メディアを使った生活や活用法など、デジタル・メディアリテラシーに関する知識やスキルを増すことができた。さらに、思考タイプを6つに分類する6色帽子というテクニックを紹介することで、議論における批判的思考を鍛えることができた。

議論による主な学びは次のとおりである。

- デジタル・メディアの課題及び文化帝国主義の功罪
- フェイクニュースの見分け方
- 子供によるデジタル・メディアの消費と管理についての認識
- 議論における6色帽子の導入

**ブルネイでの課題別視察****施設：首相府情報局**

ブルネイにおいてメディア組織は国営であり、課題別視察では首相府情報局で講義と館内視察により学んだ。まず、役職者の方からブルネイについての概要説明と情報部門についての講義をしていただき、首相府情報局のビジョンやミッション、主な事業、目的や情報戦略について教わった。次に、新聞課への視察ではブルネイの国営新聞「ブリタ・ブルネイ」紙の組織体制や発行手順について学び、編集局での説明では編集や校閲、紙面でのコラムの構成についての手ほどきを受けた。全体を通して、PYはブルネイの国営新聞とメディアについて知り、またブルネイのメディア史について説明を受けることができた。

**活動**

- 概要説明
- オフィス視察（新聞課）

**視察から学んだこと**

主な学びは次のとおりである。

- 首相官邸・情報部門の戦略的な管理

注1：メディア利用に関する調査は、PYの乗船前にオンラインにて行われた。

- b. ブルネイにおける国営新聞の運営
- c. ブルネイのメディア略史

#### グループ・ディスカッションV

##### 情報とメディア及びリテラシーに関する方策 ねらい

- a. メディアリテラシーの知識を問題解決のための創造的なプロジェクトに応用する。
- b. メディアリテラシーに関して、戦略的なコミュニケーション・マネジメントができるようになる。

##### 活動

- a. 概要説明
- b. グループ・ディスカッション
- c. ロールプレイ
- d. ポスター発表
- e. パワーポイント発表

##### 成果

情報とメディア及びメディアリテラシーに関する十分な理解と実践的な知識を得たからには、PYはメディアリテラシーを団体・地域・社会に根付かせるため、これらを戦略的なコミュニケーション・マネジメントに応用できるようになるべきである。

PYは、コミュニティが持つ実際のニーズに即して、協働情報とメディア及びメディアリテラシーに関する問題についてプロジェクトを企画する結果となった。プロジェクトは、デジタル・メディアに関して現存する問題と、解決手段としてのメディア活用との両方を射程に収めるものであった。PYは知識を応用して状況と問題の特定、目的設定、コミュニケーション・メッセージ、対象層と予定表の作成を行い、その後、メディアリテラシーと戦略的なコミュニケーション・マネジメントについてきちんと理解している発表を創意工夫を凝らして行った。6色帽子の技法も使われており、PYの批判的思考が磨かれていた。

議論による主な学びは次のとおりである。

- 戦略的なコミュニケーションに関する知識
- メディアリテラシーの知識と戦略的なコミュニケーション・マネジメントのプロジェクトへの応用

##### 実践的なスキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

手法を学んで、プロジェクト・マネジメントの実践的な知識を応用する。

##### 活動

- a. グループ・ディスカッション
- b. ポスター発表

##### 成果

事後活動プロジェクトの企画と管理については、午前中にファシリテーターから講義した後、ワークショップ

が行われた。PYは自らの興味関心に基づいて班に分かれ、事後活動プロジェクトに取りかかったが、フェイクニュース、地域におけるキャンペーン、家族関係というように幅広く問題を捉えていた。着手と分析、計画、実行、検証と評価、持続可能性という5つの要素に即して知識をプロジェクトに応用していた。PEST（政治、経済、社会・文化、技術）やSWOT、SMARTといった効果的な分析の枠組みや予算、業務と時間管理、そして評価のためのガントチャートが用いられ、（財務、資源、知識などの面から見た）プロジェクトの持続可能性も考慮に入れられていた。

##### D. 決意・期待される今後の活動

PYはDG2で知識とスキルを得て、ラスウェルのコミュニケーション・モデルに基づいてメディアリテラシーについて学んだ。さらに、理解した内容を基に知識を構造化して情報とメディアを取り扱い、ひいては各自のコミュニティを啓蒙すべく機能的なキャンペーン・プロジェクトを作り上げることも約束した。このキャンペーンは若者男女に対してメディアリテラシーについて教え、学べるものとなっており、メディアを用いて文化と伝統を守り、地元のコンテンツ・クリエイターを文化帝国主義から守るため支援し、しかし同時にグローバル化とローカルの落としどころを見つける「グローカリゼーション」に資するものである。

##### E. 評価・反省（自己評価セッション）

DGの発表後、PY全員が情報とメディアについてDG2から大変多くを学んだと述べ、ほとんどの者がこのDGに選ばれた際に立てた目標を達成できた。PYはコミュニケーション理論を応用して学びながら、メディアの力やアジェンダ、組織、所有などから派生するメディアによる効果について理解し、メディアリテラシーに関するスキルを獲得していった。また、他国におけるメディアを取り巻く状況についても理解と知識を深めることができた。

PYは課題別視察に対しても異なる角度からの知識と経験を得ることができた満足していたが、ヤフー株式会社において実際の業務を見学することができればなお良かった。ブルネイにおいては、ブルネイの国営新聞、その組織体制と発行手順について知ることができた。

PYは説明を受ける中でメディアリテラシーを、印刷媒体やハリウッド映画、テレビ番組を目にしながら批判的思考を徐々に身につけていき、またメディアにおいて隠れた意味をどのように解釈したり読み解くことができるのかを、言語的な観点のみならず記号的な扱いや配置の妙など非言語的なものも含めて学んだ。こうして、PYはいかにメディアが自分たちの考え方に影響を及ぼし得るのか、また映画において見られたイデオロギー・

シンボルを通した文化帝国主義についても学んだ。

ファシリテーターの定めた「黄金律」<sup>注2</sup>によって、他人の目を恐れずに自分の考えを自由に話すことができたPYに言ってもらえた。そして全員が安心して自己評価セッションにおいて話せるようにファシリテーターを信任してくれた。しかしながら、簡易調査ではPYの興味や期待が2つに分かれることがわかった。25歳以下の者（学生や新卒者）はDGの自身について非常に満足する傾向があったが、25歳以上の者は一定程度の就労経験があるため、時間の制約の存在を知りながらもコミュニケーション・キャンペーンや広告、ニュース報道などについての議論を期待していた。

結論としては、学びを深めながらも楽しむことができ、DG2で非常に有意義な時間を過ごすことができたというPYたちの言が目立った。

##### F. ファシリテーター所感

PYたちの活動的な個性、そしてほとんどの者にとってDG2が第一希望であったことによる興味や意識から、円滑に進行することができた。

メディアは今日の日常生活において質的だけでなく量的にみても人々に影響を与える重要な役割を担っていることから、情報とメディアの議論はメディアリテラシーに関する問題を取り扱うよう設計された。考えを述べ合うだけでは意見交換に終始しがちで、一方、理論に基づいた考えは知識を構造化してくれる。こうした信条に即して議論が進められたわけだが、その結果、ハロルド・ラスウェルのコミュニケーション・モデルに沿った形で行われることとなった。これは直線的なモデルで一方のコミュニケーションのみを扱うものであるが、最も有力なコミュニケーション・モデルの一つとみなされている。このモデルは「誰が」（送り手）、「何を」（伝達内容）、「どの経路で」（コミュニケーション・チャンネルまたはメディア）、「誰に」（受け手）、「どのような効果で」という5つの要素から成り立ち、コミュニケーションの過程や中身を評価する際の分析ツールとして使われた。各要素の質問に対して回答がなされ、コミュニケーションの過程が進んでいくが、更にファシリテーターが双方向コミュニケーション用に調整を施し、議論にはメディアリテラシーの知識構造を盛り込んだ。情報とメディアについて理解し、メディアリテラシー



注2: 「黄金律」として、ディスカッションにおいて悪い考えというのは存在せず、異なる考えがあるだけである、と定めた。また、DGにおいて意思疎通ができるのであれば、PYに完璧な英語は求められないとしている。

を獲得するために、PYは乗船前に与えられた課題について準備しなければならなかった。というのも、PYは自らの経験に基づいた批判的なリテラシーを築く必要があり、構造とパターンを一目見ただけで、メディアで提示されたアジェンダを取捨選択する裁量を持つことは、一生モノの学びとなった。更に、PYには若きリーダーとして事後活動を通じて、こうした知識やスキルを自分のみならずコミュニティや社会に対しても持たせることが期待される。

ファシリテーターにとっては、4つの壁が存在した。一つ目は、人数である。41名のDGは大所帯と考えられ、小さな班に分けたりもできるものの、グループ内での意見交換に影響し得る。二つ目は、PYの背景の幅広さから、意見や期待がバラバラになり得ることである。三つ目は、PYの英語による会話力次第では、不得手な者が黙ってしまいかねないことである。そして四つ目は、各活動内容に対してPYの興味関心にムラがあることで、グループ・ディスカッションの焦点に影響が出る可能性があることだ。こうした壁に対処するため、ファシリテーターはまずPYたちを小さな班に分けさせ、4班での体制が議論及び運営する上で効果的であることを見出した。次に、毎回とも導入や概要説明を行うことでPYが同じ土台の上で知識を持てるようにした。さらに、議論に「黄金律」を設定した。そして、DGには楽しみながら学ぶという方針を持ち込み、アクティブラーニングの手法を用いてPY同士で競わせるようにした。

DGの結論として、PYは情報とメディアやそれらの効果についての知識、ASEANのメディア、自分たちの見出したメディアリテラシー、戦略的なコミュニケーションのための具体的で実践的な方策、批判的思考を用いたプロジェクト・マネジメントなどを学んだ。しかし、それだけではなく、対人スキルやリーダーシップ、相互理解を強め、各回の議論を通じて得た説得的なコミュニケーションスキルを用いて協働したようにファシリテーターの目は映った。

最後に、既参加青年として、「東南アジア青年の船」事業、内閣府、青少年国際交流推進センター、そして関係各方面すべての皆様に対し、「一度PYになったら、一生PY」とはよく言われるが、「にっぽん丸」に里帰りし知識と経験を還元する機会をいただいたことに感謝を申し上げたい。



### (3) 国際関係（日・ASEAN協力）グループ

PY：40名

#### A. グループ・テーマ・インフォメーション

##### a. テーマの概要

PYは、日・ASEAN対話関係の歴史的背景、その基本原則、道のり、課題について知る。その上で、連帯感や相互信頼、互いの伝統・価値観の尊重や理解を促進させる意識をもって、若者ならではの革新的な行動や取組を通じ、将来の日・ASEAN協調にどのように貢献できるか議論することが期待される。

##### b. 期待される成果

- 日・ASEAN対話関係の構築にあたり、その基本原則、道のり、課題について説明できるようになる。
- 「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」に従って日・ASEAN対話関係を強化する実践的な枠組みを使えるようになる。
- 多様性を認め合い、寛容さを善しとするような友好関係の醸成のために、ソーシャルメディアを効果的に活用して厚い友情とネットワークを育てるようにする。

##### c. 身につく能力

###### 知識

- 日・ASEAN対話関係の発展における主な出来事について学ぶ。
- 分野横断的連携に重きを置いたプロジェクト・マネジメントの実践的な理解を身につける。

###### スキル

- 将来の世界的課題や機会に関するマネジメント面や技術的な上級スキルについて自信と競争力をつける。

###### 行動

- 他人に対し偏見なく広い心で接することができる。
- 国際関係の取り扱いにあたり、ウィンウィンな方策を実現する。

#### B. 事前課題

##### 個人課題 1

「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」（2013年及び2017年）を読み解き、青年に関する部分を要約すること。

##### 個人課題 2

論文「Designing and Implementing Cross-Sector Collaborations (2015年)」を読んで要約し、現在の世界的課題を解決することにどう関係するかを示すこと。

##### 国別課題

青年活動の状況と自国の発展について、以下の観点から各国ともパワーポイントによる発表を準備すること。  
(1)（行政上、立法上の）意思決定過程において青年が

担う役割、(2) 青年が有する、企業に雇用されることを可能にする職業能力、(3) 青年のロールモデル（自国の若者が尊敬する人物について、どのような業績があるのかを説明すること）。

#### C. 活動内容

##### 日本での課題別視察

施設：国際機関日本アセアンセンター

##### 活動

- 国際機関日本アセアンセンター藤田正孝事務総長から、経済連携の観点から日・ASEAN対話関係について参加型のプレゼンテーションが行われた。
- 藤田氏との質疑応答
- グループ・ディスカッション及び意見共有を行った。10名ごとの班に分かれて、(1) 日本とASEANは貿易、投資、観光、人的交流の各領域でいかに連携を深めることができるか、(2) 日・ASEAN対話関係を深めるために青年は何ができるか、を議論した。

##### 視察から学んだこと

- 日・ASEAN関係は1973年にその基礎が築かれ、1977年の日・ASEAN首脳会議の開催をもって正式なものとなった。それ以降、この連携は広がりや深さを増し、政治・安全保障、経済・財政、また社会・文化面にも及んだ。経済面では、2008年4月14日に日・ASEAN包括的経済連携（AJCEP）協定が両者によって署名され、同年12月1日に発効した。
- 1981年の国際機関日本アセアンセンター設立は、福田ドクトリンの実行であった。
- グループ・ディスカッションVにおいて更に議論することになる、日・ASEAN対話関係を生産的で充実したものとするうえで、両者の青年はどう資することができるかについて、PYは予備的な考えを持つに至ることができた。

施設：独立行政法人国際協力機構（JICA）

##### 活動

- ASEAN域内における連結性の格差をなくすための開発支援についてJICAの概要説明がなされた。
  - JICA内の視察を行った。
- 視察から学んだこと
- この視察では、ASEANの連結性という概念と、その5大柱である、(1) 持続的なインフラ整備、(2) 情報革新、(3) 円滑な物流、(4) 調和のとれた法制度、(5) 人の移動について学んだ。
  - また、(1) ASEAN域内での連結性を強めるインフラ

開発へのJICAの関与、(2) ASEANの南部経済回廊や海洋ASEAN経済回廊の構築に関してJICAがどう戦略を立てており、支援を行う国や機関と協働しているかについても学んだ。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

日・ASEAN対話関係の発展における主な出来事についてどのようなものがあったかを学ぶ。

##### 活動

- これまでの日・ASEAN対話関係（1973年から2017年まで）の背景や発展についての政治的、経済的、社会文化的観点による概説。
- 以下の質問に対するグループ・ディスカッション及び考えの共有。
  - 日・ASEAN対話関係の主な推進力は何か。
  - ASEAN地域主義によって日本とASEANがどうすれば共に利益を享受することができるか。

##### 成果

- 日本のASEANとの関係性の基礎は常に貿易と投資であったと確認した。日・ASEAN対話関係の過去を振り返ると、その在り方は経済外交（日ASEAN合成ゴムフォーラム）から相互理解の促進（福田ドクトリン）へ、更に東南アジア地域の政治的経済的安定に向けた開発支援へ移り変わってきた。
- ASEAN地域主義が、日本のASEANとの外交上、最重要の成果であると学んだ（「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」）。ゆえに、戦略レベルでは、日本とASEANは地域の調和と繁栄を確かなものとするために両者の合意と信頼に基づいた対話関係を進展させるべきである。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

前回の議論で得た成果を踏まえて、日・ASEAN対話関係に立ちほだかり得る課題を見つける。

##### 活動

- 構造（枠組み）や（以下のASEAN主導のもののような）戦略的優先度という観点から日・ASEAN対話関係を概説した。
  - ASEAN+日本：1973年～（ASEANと日本）
  - ASEAN+3：1997年～（ASEANと日中韓）
  - 東アジア首脳会議：2005年～（ASEANと日中韓、豪州、ニュージーランド、インド、米国、ロシア）
- 以下の質問に対するグループ・ディスカッションと考えの共有
  - 日・ASEAN対話関係の今後に立ちほだかり得る課題

- 連携を強めるために両者は何ができるか。

##### 成果

- 絶え間なく変わり続ける世界において、日・ASEAN対話関係は、様々なASEAN主導の枠組みにより、政治的安全保障、経済、社会文化の各分野における目覚ましい進展を見せた。
- 以下は、日・ASEAN対話関係の今後に立ちほだかり得る課題としてPYが議論中に言及したものである。
  - 政治的安全保障
    - 足元の過激主義や急進主義、国際組織犯罪の脅威
    - 中国の台頭と世界の新秩序における地政学的影響
  - 経済
    - ASEAN各国間での縮小する発展格差
    - 米中貿易戦争
    - 新興経済としてのインドの台頭と、ASEAN地域での地政学的勢力図において日本と競合する潜在性
  - 社会・文化
    - 文化面では、日本はASEAN各国に多大な影響を及ぼしている。
- その他、2023年の日・ASEAN友好協力50周年を見据えて両者の連携を強める戦略的な施策を考案した。
  - ASEAN主導による全ての枠組みを通じて、費用を共同負担しながら、各方面での日ASEAN連携を強化する
  - 日・ASEANの開発連携プログラムの発展や実施について、広く一般からの、また市民団体による関与を強める（例：職能団体や商業団体、青年関係の団体、学術機関、女性活動の領域、地域コミュニティ、研究機関）

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

分野横断的連携の概念と、その国際関係への適用について学ぶ。

##### 活動

- 分野横断的連携の概念と、その平和志向のアイデアへの活用について概説。
- 以下の質問と活動について、班に分かれた議論と考えの共有。
  - アジア太平洋地域における平和志向の価値観を強めるべく、分野横断的連携をどう活用するか。
  - 平和志向の考えを象徴するのに使えるような、シンボルやエンブレムをにっぽん丸で見つける。

##### 成果

- 分野横断的連携の概念は、パブリック・マネジメントの領域に属し、戦略的目標を達成する上で、相互

- に繋がった複数の主体による貢献を強調している。戦略の観点からいえば、共同で活動に当たる主体は、個々だけでは（個別行動では）得られないような大きな前進を共にすることができる。
- b. また、平和の前向きな考えを強めることができる国際関係において分野横断的連携がどれほど意味を持つのか、主要な点についても学んだ。その一つは、相互の合意と信頼に基づいた対話の促進を通じたものである。これにより、目的達成のための社会システムの構築に向けた協働を、全ての主体と利害関係者に動機付けさせることになる。たとえば、「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」とその実施要綱（2013年及び2017年）では、以下の戦略的成果のために分野横断的連携を通じた日本とASEAN間の協働を強めることの重要性を謳っている。
- 平和維持、安全保障、アジア太平洋地域の安定のための取組を強化する。
  - 生産的で豊かな日ASEAN対話関係
  - 日本とASEANの人々の生活とその糧を向上させる。
  - ASEANの3本柱に即した草の根交流を通じて心の通った連携を確実にすることに向けた相互信頼を強める。
- c. また、舵など、平和志向の考えを象徴するのに使えるような、シンボルやエンブレムをにっぽん丸で見つけた。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

グループ・ディスカッションIIIの続きとして、現在の国際関係についてのシミュレーション演習（ロールプレイ）を行う。

##### 活動

- a. 南シナ海における相互信頼と安心に向けた、当事者会議のロールプレイ
- b. スポーツの価値を国際政治に取り入れることで平和と調和を更に確固たるものにするという日本の革新的な手法についての概説

##### 成果

- a. 議論・討議を通して以下の知識を得ることができた。
- 礼儀正しいことは、万国共通の外交規範である。
  - ASEANの取組に関する実践的な知識やASEANの会合における外交儀礼
  - 平和と調和をより確かなものとし、多様性を尊重するためのスポーツの重要性
- b. 2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えた事業であるSPORT FOR TOMORROWという日本の取組についても学んだ。この事業の主眼は、世界中でオリンピック・パラリンピックの精神を全ての世代に向け、そして中でも若者に向けて啓蒙する

ことである。

- c. 分野横断的連携の姿勢を持って、スポーツに関係する複数の世界的機関も絡んでいるが、世界的機関との連携は、スポーツの力を通じて平和志向の価値観を強める努力を確かなものにする日本の取組を、更に実りあるものとするだろう。

#### ブルネイでの課題別視察

施設：外務省

##### 活動

- a. Nasri Abdul Latif氏によるASEAN共同体ビジョン2025と、日・ASEAN対話関係を新たな地平に押し上げるためのブルネイの役割についての講義
- b. Nasri Abdul Latif氏との質疑応答
- 視察から学んだこと**
- a. この視察からは、（1967年の設立以降の）ASEANの歴史と将来のインド太平洋の秩序を踏まえた日ASEAN対話関係の見直しについて学んだ。
- b. また、ブルネイが2021年にASEANの議長国となることについても知った。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- a. 日・ASEAN対話関係を更に青年と相乗効果のあるものにするべく推し進めるために、青年が関係する取組としてどのような型のものが良いか特定する。
- b. 青年に関するASEANのワークプラン（2016～2020年）に基づいたASEANの連携における戦略的重点付けについて学ぶ。

##### 活動

青年関係の革新的な方策によって日本とASEANの連携強化にPYがどう資することができるのかにつき、班別で議論・意見交換を行った。

##### 成果

- a. ASEAN社会・文化共同体（ASCC）の柱に基づいた、青年活動や育成に関するASEANの連携について学ぶことができた。域外については、日中韓を含めた他者との相互尊重や感謝、平和、調和や密接な協調といった精神に基づく青年の育成や支援を推し進める権限が、ASEANの青年セクターに与えられている。
- b. 「日・ASEAN友好協力に関するビジョン・ステートメント」に基づく、生産的で豊かな日・ASEAN対話関係の実現に向けた、青年の役割について意見を出した。
- 1) 主なもの
- 青年に関する政策作りについての青年間における対話やネットワーキングのために、ソーシャル・メディア・プラットフォームやその他媒体を前向

きに最大限活用する。

- 2) 商業的なもの
- 若く熱意のある起業家が牽引する創造的な産業での成長領域を強化することによって、堅調な経済とコミュニティの開発を継続させる。
- 3) 印象的なもの
- 多様性における調和の精神に基づき、Eスポーツやパフォーミング・アート、クラブ・シーン、食の祭典を通して、日本とASEANの青年が互いの文化を学べる機会を創出する。
- c. 青年に関するASEANのワークプラン（2016～2020年）に基づいたASEANの連携における以下5つの戦略的重点につき学んだ。
- 1) 青年の起業
  - 2) 青年の雇用され得る能力
  - 3) ASEANの認知向上
  - 4) 青年によるボランティア活動とリーダーシップ
  - 5) 青年の打たれ強さと競争力

#### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

##### ねらい

- a. 考えや解決策について順次発表したり分析したりすることを通して、コミュニケーション能力をかん養した。
- b. 日本とブルネイでの課題別視察、そしてグループ・ディスカッションについて総括した。

##### 活動

- a. 参加国各国における青年の活動や育成の状態についてパワーポイントを使用した発表を行った。
- b. 日本とブルネイでの課題別視察について総括した。

##### 成果

- a. PYは各国における青年の活動や育成の状態について簡潔に発表することができた。
- b. DGの成果発表について、初稿のパワーポイントを作り上げることができた。

#### D. 決意・期待される今後の活動

##### ねらい

青年関係の革新的な方策を用いて将来の日本とASEANの連携を強めるべく、PYはこれまでのすべての課題別視察やグループ・ディスカッションによる成果を踏まえ、自らの考えをまとめ、事後活動の計画を立てる。

##### 活動

- a. (1) DGでの主な学びと、(2) (各国ごとに行われる)事後活動についての、グループ・ディスカッション及び意見交換
- b. 資源動員についての簡単な講義

##### 成果

PYは事後活動について以下の案・計画を考えるに至

ることができた。これらについては、更なる検討が重ねられることになっている。

- ・ブルネイ：メンタルヘルスについての認知向上
- ・カンボジア：がん患者のための意見交換・相互学習プラットフォーム（CRANE Project）
- ・インドネシア：アートを通じた子供のための防災訓練
- ・日本：デジタル技術を用いた、小学校におけるASEANの認知向上（Magic Window）
- ・ラオス：文化イベントやワークショップを通してラオス文化を海外に広める
- ・マレーシア：オラン・アスリ先住民コミュニティの自己肯定感向上
- ・ミャンマー：ヤンゴンとマンダレーにおける安全運転意識の啓蒙
- ・フィリピン：ピコール地域のレガスピ市における減災のための青年ネットワーク
- ・シンガポール：革新的な問題解決設計により、精神疾患に対する悪印象をなくす。
- ・タイ：日本とASEANにおいて、「東南アジア青年の船」事業のネットワークを通じた国際連携の推進
- ・ベトナム：読書キャンペーンによるASEAN認知向上

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

5回のグループ・ディスカッションと、日本とブルネイの課題別視察を通じて、PYは主に以下の学びを得ることができた。

- ・過去45年間にわたり日本とASEANの対話関係を導いてきた主原則は以下のとおりである。(i) 相互理解と信頼に向けて、開かれた対話を尊重・志向すること。(ii) 世界的に認識されている国際法の原則に従った、平和、安全保障、地域の安定の維持についての双方で平等な連携
- ・既存のASEAN主導の枠組みを通じて、日・ASEAN対話関係は政治・安全保障、経済、社会・文化の各領域において目覚ましい進展を遂げてきた。(例) ASEAN+日本、ASEAN+3、東アジア首脳会議（EAS）、ASEAN地域フォーラム（ARF）、拡大ASEAN国防相会議（ADMMプラス）、ASEAN海洋フォーラム拡大会合（EAMF）
- ・「生産的で豊かな日・ASEAN対話関係」の実現には、各利害関係者による寄与とそのための基盤づくりが必要となる。分野横断的連携は、こうした期待に対して貢献できる可能性を持っている。

#### F. ファシリテーター所感

DG3のテーマを概念化する上で様々な方法が執られた。グループ・ディスカッションにおいては実践的な内容に重点が置かれ情報量が多かったが、それはこれまで

の歴史を振り返って（1973～2017年）、日・ASEAN対話関係がどう発展してきたのかについての知識をPYに持ってもらうためだった。こうした意図を携えていたが、PYが実践的な枠組みを用いて日・ASEAN対話関係を生産的で豊かなものへと推し進めていけることを切に願っている。

グループ・ディスカッションの初回と2回目については、積極的な者も見られ円滑に進んだが、後半の回では多忙な船内活動スケジュール、言語の壁、体調不良に阻まれ、それ以上の参加度合いが見られなかった。悲しいことに、事前課題の提出期限もきちんとは守られなかったこともあり、PYの議論を活性化すべく、用意されていた題材を微調整する必要があった。3回目の題材についてははかして調整がかけられたのだが、集中できない者の姿も認められた。もっと教えてもらいたいという積極的に興味を示す者は好んでディスカッション外の時間で私に話しかけてくれた。

ともあれ、私はこのDGにおけるPYの働きや出来栄を



に満足しており、5回に及ぶディスカッション、課題別視察、事前課題を経て、皆が知識と実践的なスキルを身につけてくれていることを願っている。そして、第45回「東南アジア青年の船」事業に尽力したすべての皆さんに祝福と御礼を申し上げたい。私を第45回「東南アジア青年の船」事業のファシリテーターとして選任いただいた内閣府、多大なご支援をいただきグループ・ディスカッションの円滑な運営でお世話になった管理部員の皆さん、船上でのお世話やおもてなしをいただいた、にっぽん丸の二宮船長と乗組員の皆さん、そして訪問国活動の全行程につき準備をしていただいた「東南アジア青年の船」事業の事後活動組織とボランティアの皆さんに感謝の意を表する次第である。末筆ながら、同僚のファシリテーター、Zain、Tor、Zenn、Ayumi、Evan、Nery、Azizへは、友情と応援・支援をいただき、気にかけていただき、常に伴走いただいたことに感謝申し上げたい。「東南アジア青年の船」事業のファミリーへ、ありがとう。



#### (4) 長寿社会を生きるグループ

PY：39名

##### A. グループ・テーマ・インフォメーション

###### a. テーマの概要

PYは、急速に高齢化が進むことが予測される社会の中で、高齢者が持続可能で、健康かつ充実した生活を送ることができる社会を目指すにあたっての課題を整理する。その次に、理想社会の将来像について意見交換し、次世代を担うものとして青年自身がこれにどのように貢献できるか議論する。

###### b. 期待される成果

- PYは、世界の高齢化の現状、持続可能で健全な高齢化社会に向けた課題、そして特にASEANと日本におけるこれらの課題に対する現在の取組と政策についての理解を深める。
- PYは、他国が「すべての人のための社会」と持続可

能で健康な高齢化社会に向かってどのように取り組んでいるかを学ぶ。

- PYは、持続可能で健康な高齢化社会の課題に取り組む、理想的な「すべての人のための社会」を実現するための効果的なプログラムを積極的に自らの力で提案できる。
- c. 身につく能力知識
  - グローバル、ASEAN各国、日本からみた高齢化社会の現状
  - 持続可能で健康な社会を実現するための現在の取組や政策
  - 「高齢化に関するマドリッド国際行動計画」についての理解

##### スキル

- 多様な聴衆に向けた実践的なプレゼンテーションスキル
- 問題や課題の根本的な原因を特定し、それらの原因に対する解決策を理論的に考えることができる力
- 多文化環境でのグループ・ディスカッションスキル
- アイデアを議論し、安心した環境の中で意見を議論することができる能力
- 自らの意見を口頭と書面で明確に発表することができる能力

##### 行動

- プロフェッショナルで外交的な態度
- 各ディスカッション・セッションに対する良い準備
- チームワークと対人関係スキル

##### B. 事前課題

###### 個人課題1

各PYは、サイズ自由の2枚の写真を使い、自国の高齢者の概要を紹介した。各PYは、セッションIの中で、この課題を発表した。

###### 個人課題2

各PYは、「すべての人のための社会」を実現するための政府の取組の一つを選ぶか、高齢者の問題を扱う取組について、事前に調べてきた。セッションIIIでは、小グループでこの事前課題で調べたことを紹介し合った。

###### 国別課題1

各参加国は、自国の高齢者を取り巻く現状と課題について議論した。

- 高齢者に対する自国の社会保障とサービスの状況とは
- 自国の高齢者の社会的な状況とは

###### 国別課題2

各参加国は、持続可能で健康的かつ充実した生活を高齢者が送る社会を実現するために、各国で抽出された問題や課題に対処できるプログラムの提案を行った。これは、セッションVの中で、各参加国により発表された。

##### C. 活動内容

###### 日本での課題別視察

施設：社会福祉法人江東園

###### 活動

- PYは江東園を訪れ、子供たちと高齢者の朝の運動に参加した。施設とそのサービスについての概要が、江東園職員によって講義された。
- 高齢者も含めた住民に対する総合相談窓口のサービスを併設する地域の福祉拠点である「なごみの家」を訪問した。
- PYは、江東園の施設内見学を行い、高齢者との折り紙交流や、施設内の生活について1対1で話す機会を

持った。

###### 視察から学んだこと

- 革新性。PYは、地域の高齢者と子供が一緒で世代を超えた交流ができることに感銘を受けた。
- 資金の重要性。PYは、日本政府が高齢者の生活と住宅に関するサービスを提供する関係機関に対して財政的な支援を行っていることを学んだ（最大90%まで）。
- 解決策の一部を担う存在としての青年。PYは、持続可能な高齢化社会の実現に向けて、青少年が重要な役割を果たすことができることを学んだ。健康的なライフスタイルを送ることに對する啓発及び社会的、世代間のつながりの重要性は、持続可能な高齢化社会を達成するための重要な要素である。

###### グループ・ディスカッションI

###### ねらい

高齢化についてのさまざまな誤解、高齢者人口の世界的な状況、及び社会への影響を理解すること

###### 活動

- ファシリテーターとPYによるDGで期待されていることの確認
- DGのルール設定
- DVD「高齢化社会とは何か」の鑑賞と2つの主な高齢化の原因、1) 出生率の減少、2) 平均寿命の延伸、について振り返る
- 模擬ゲーム（高齢化の視座）：PYは、様々なシナリオを用い、高齢者についてどのように考えるかを体験した。（例：働く高齢者、健康的な加齢の概念等）
- 振り返り：ファシリテーターは、PYに90歳の自分自身を想像させ、紙にその姿を描くよう課題を出した。その後、「美しい100年の老化」のビデオを鑑賞した。このビデオは、カップルの外見を50歳、70歳、90歳に見るようにマークを施し、お互いをどう思うかについて書く内容であった。PYは、ファシリテーターのリードにより、人生は短く限りがあることを、ビデオの振り返りを通して感じる事ができた。
- 老化に関したよく聞かれる誤解、及び身体的、社会的変化に関するクイズを実施した。
- 高齢化問題に対する議論（高齢化が経済、社会、文化及び政治に与える影響）
- 老化に関する問題についての小グループ・ディスカッション。ディスカッションの結果は、ロールプレイ形式を用いて発表された。

###### 成果

PYは、特に身体的変化に現れる老化現象の過程をより深く理解した。加齢や高齢者に対してよく見られる誤解を学んだ。また、高齢化が経済、社会、文化、政治の各分野に与える影響についても学んだ。PYは、技術の

進歩と長寿命化も考慮し、高齢化が進む結果として生じる課題に取り組む必要があることを理解し始めた。青少年はこれらの課題に取り組む上で大きな役割を果たす。

### グループ・ディスカッションII

#### ねらい

PYは、高齢化社会を取り巻く課題に直面し、この課題解決に向けた成功例について学ぶ。

#### 活動

- 急速な高齢化に伴ういくつかの重要な問題を紹介するビデオ「世界の高齢化」を鑑賞した。
- ドイツの社会保障や高齢者雇用など、ドイツで提案された政策に反対する議論を紹介するビデオ「高齢化するドイツ」を鑑賞した。
- これらのビデオ鑑賞後、振り返りを実施した。PYは、高齢化に伴う課題を解決する努力の中で、必ずトレードオフが生じるのはなぜか議論した。例えば、社会保障問題、年金制度（高齢者への無料の財政支援）に対する、資金又は税（現役世代からの搾取）の関係など。
- グループ・ディスカッション：急速な高齢化に伴う課題に対処する江東園の取組について振り返り。2つの小グループは、江東園が実施する地域包括ケアシステムについて、別の2つの小グループは、江戸川スマイルコミュニティ事業について振り返った。その後、ディスカッションの内容が全体に共有された。
- 国別課題1：PYは小グループに分かれて、各国の事前課題について共有し議論した。ディスカッションの結果は、DG全体で共有された。

#### 成果

- PYは、グローバル、ASEAN各国、日本の視点から、高齢化社会を取り巻くさまざまな問題についてさらに理解を深めた。
- PYは、安心できる環境で議論を行い、学術的に討論することができた。
- PYは、高齢化に対処する成功事例からその成功因子を抽出し、高齢化社会の課題に対処できるプロジェクトを考えることができた。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

PYは、高齢者が生活する上での課題と障害について理解する。また、高齢者と適切にコミュニケーションを取り、高齢者の健康的な生活を実現する方法について学ぶ。

#### 活動

- ファシリテーターは、「マドリッド国際行動計画」の概要を説明した。
- PYは、「マドリッド国際行動計画」の意義と取組について議論した。

- PYは、高齢者疑似体験を行うことで、加齢に伴う障害を体験した。
- 事例検討：PYは、異なる成功事例を与えられ、事例の評価を実施した。事例は、ヨーロッパの雇用、社会保障、医療、高齢者の社会的権利などに関する取組であった。その後、全体に議論の結果が発表された。
- 3分間のテスト：このテストを通して、包括的な指示を与えられないがために人々が誤解をし、非効率的な作業を行うことを体験することができた。この活動は、高齢者どどのようにコミュニケーションを取るべきかをPYに考えさせた。また、ファシリテーターによって、高齢者との適切なコミュニケーションの取り方が説明された。
- ファシリテーターは、ASEAN各国と日本の高齢者にとって持続可能で健康的な社会を実現するための根拠のある戦略について紹介した。例えば、健康的な食事と生活習慣、毎日の運動の重要性、社会的つながりと地域とのつながり等。

#### 成果

- PYは、高齢者が直面する現在の課題と障壁、そして加齢に伴う身体的変化についてより深く理解した。また、どのように健康的に年齢を重ねることができるのか学んだ。
- PYは、高齢化に対する取組を適切に評価し、なぜこれらの取組が効果的で持続可能なのか考え議論することができた。
- PYは、高齢者とのより良いコミュニケーションの方法と高齢者の声に積極的に耳を傾ける重要性について学んだ。

### グループ・ディスカッションIV

#### ねらい

- PYは、国連による持続可能な開発のための2030アジェンダ「誰一人取り残さない」という理念の重要性について理解する。
- PYは、身体、経済、感情、性的、ネグレクトなど、様々な高齢者に対する虐待に気づくことができる。
- PYは、虐待につながる様々な要因を理解することができる。例えば、社会的孤立、家族関係の崩壊、介護者のストレス、地域社会の資源の欠如。

#### 活動

- 偏見ゲーム：PY5名は、他のPYと友達になることを課されるが、他のPYは大声で話をし、怒ったような態度を示し、その5名に触れられたり、交流したりすることを拒否した。このゲームを通して、高齢者が直面する加齢や偏見を体験することができた。
- ファシリテーターは、国連の2030アジェンダにおける「誰一人取り残さない」という理念について、高齢化と関連した課題について紹介し議論した。

- ファシリテーターは、様々な高齢者虐待について説明した。グループはその後5つに分かれ、5種類の高齢者虐待及び現実にはそれらの虐待にどう対処していると思うか、ロールプレイを行った。
- ファシリテーターにより、その5つのロールプレイの振り返りを行った。
- 振り返り活動1：PYは、誰かを決めつけて評価した時と、誰かに評価された時の体験について振り返った。
- 振り返り活動2：PYは、自分の高齢の両親又は祖父母を誰かが差別した時の体験について、自分がどう感じたかを記載した。
- 個人課題2：PYは小グループに分かれ、高齢者に対する自国の取組に共通していることを話し合った。その結果は全体に発表された。

#### 成果

- PYは、「誰一人取り残さない」という理念を具体的に体験し理解した。
- 差別される時の気持ちを学んだ。
- 様々な種類の虐待について気づき、それを引き起こす要因について考えた。虐待に遭遇した時にどのような行動をすれば良いかを学んだ。
- ASEAN各国と日本の高齢化に対処する取組について学んだ。

### ブルネイでの課題別視察

#### 施設：文化青年スポーツ省地域開発局高齢者活動センター活動

- ブルネイの文化や生活習慣に触れ、地元住民と社会的活動に参加した。
- PYは、地元の高齢者と交流し、ブルネイでの生活状況について1対1の対話をした。
- 伝統的な歌や踊りを高齢者から学んだ。

#### 視察から学んだこと

- PYは、高齢者が家族から見放されないように、ブルネイには老人ホームがないことを学んだ。
- PYは、ブルネイの高齢者が60歳以上になると政府から経済的援助を受けることを学んだ（250ブルネイドル）。訪問先の地元住民や職員に対して、政府がどのようにこの援助を継続できるか疑問を投げかけ、高齢者のための持続可能な社会保障に向けた解決策を見つけることは常に困難であることを学んだ。
- PYは、ブルネイでは、血縁関係と家族のつながりが重要であることを学んだ。
- 社会とのつながりと社会参画は健康的な高齢化にとって、とても重要であることを学んだ。センターは、毎週高齢者が集うことができるきっかけ作りを提供していた。

### グループ・ディスカッションV

#### ねらい

- PYは、国連アジェンダ2030の「誰一人取り残さない」という理念を理解する。
- PYは、人生の価値、存在の意味、死の概念について理解する。

#### 活動

- PYは人生を良くするものは何か、人生の目的は何か、良い人生とはどんなものか、について5分間一人で考え、小グループに分かれ、何が良い人生を形作るのか話し合い、ロールプレイを行った。発表は90秒のテレビ広告の形式で行われた。グループがロールプレイの発表準備を行っている間に、ファシリテーターは何かのPYに対して、グループから離れ数分後に戻ってくるように指示を出した。グループに対しては、グループ内の何名かが行方不明であると警告を伝え、この活動は行方不明のPYなしには継続できないこととなった。これは、人口の高齢化問題に対処する「誰一人取り残さない」という理念を模擬的に経験するために行った。また、この活動は、タスク重視型と人を中心に据えたリーダーを経験するリーダーシップ育成の活動でもあった。PYは、ロールプレイと「誰一人取り残さない」という活動について振り返りを行った。
- お葬式の体験活動：PYは、友人、家族、職場の同僚に、棺に横たわっている時にどんなことをしてもらいたいか想像する活動を行った。この活動は、スティブン・コヴィー『7つの習慣』で用いられ、人が成功をどのように定義するか考えることができた。
- PYは、死の概念を考え、なぜ残された日々を数え、重要なことだけに集中することが重要であるかについて意見交換と振り返りを行った。

#### 成果

- 「誰一人取り残さない」という理念について受入れ、深く理解した。また、PY同士の絆も強くなり、より仲良くなることができた。良いリーダーとは、タスク優先になるべきではないことも学んだ。
- PYは、人生で何が本当に重要で、なぜそれを忘れやすいかを理解した。
- 人生における成功とはどんな意味があるのか、存在の意味とは何かについて理解した。
- 時間と命は限られていることを認識した。

### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

#### ねらい

- 個人とグループでのプレゼンテーションスキルを磨く。
- 簡潔に分かりやすく意見を述べるコミュニケーションスキルを向上させる。

- c. 小グループでのディスカッションや、意見を伝える時の自信を得る。
- 活動**
- a. 様々な小グループ・ディスカッションで、意見や考えを表現することを経験した。
  - b. セッションの中で、ロールプレイ形式や口頭でのディスカッション結果を発表することができた。
  - c. 短時間でディスカッション結果を準備し、発表することができた。
- 成果**
- a. PYは、積極的に様々な小グループ・ディスカッションに参加することができた。
  - b. 個人又はグループで話し合ったことについて、どのように効果的にメッセージを伝えることができるかの方法を学んだ。
  - c. PYは、短時間でプレゼンテーションの準備を行い、結果を様々な方法で発表を行うスキルを身に着けた。
- D. 決意・期待される今後の活動**
- ディスカッション・セッションの結果として、各参加国により提案されたプロジェクト案のまとめを以下に示す。

a. 市民参加

国名	プロジェクト名	ゴールと目的	活動内容	期間
ラオス	チャンスを与えよう	高齢者のための日常生活用品を揃える	経済的理由によって日常生活用品を購入できないピエンチャンに住む高齢者と障害者のために、青少年が中古の日常生活用品を集める。	6か月
日本	実りある果実	青少年が、農村部の高齢化の問題について理解し、ボランティア活動に参加できるようになる活動	東京でボランティアを集め、岩手の野菜やフルーツ農家の収穫最盛期にボランティアとして手伝うことができるよう研修する。	2か月 (2019年7～8月)

b. 生計の改善

国名	プロジェクト名	ゴールと目的	活動内容	期間
ミャンマー	高齢でも金色に輝くオンラインストア	高齢者に経済力をつけ、生活満足度を向上	高齢者が工芸品制作のスキルを身に付けられるよう研修を行い、フェイスブック上のオンラインで宣伝、販売する。	6か月
マレーシア	白髪の賢人、白髪の幸福な人	高齢者への愛を伝えるとともに、生産活動を通して、高齢者がもう一度学び、教えることができる	高齢者に工芸品制作の技術を教え、フェイスブック上のオンラインストアで宣伝、販売を行う。	2日
タイ	一緒に成長しよう	パッターニー州の高齢主婦の会の収入を増やす	パッターニー州の高齢者によって作られたロティ販売を拡大し、フェイスブック上のオンライン店舗スーパーやコンビニなどにも広げる。	6か月

c. 啓発活動

国名	プロジェクト名	ゴールと目的	活動内容	期間
インドネシア	リメンバー・ミー	マカッサル市の100名の市民に対し、認知症についての啓発活動を実施する	週1回公共施設でブースを設置し、認知症についての情報を、オンライン上と掲示板に定期的に提供する。	1か月 (2019年2月)
ブルネイ	輝ける高齢者たち	ブルネイの青少年に対し、高齢化社会についての啓発活動を行う	共生社会を実現するために多世代交流の啓発活動を行うワークショップを実施する。	6か月
ベトナム	健康的で一人丸とした心を目指す	慢性期疾患についての啓発活動を行う	北ベトナムの数か所でワークショップを行う。	6か月
シンガポール	誰一人取り残さない	高齢化についての青少年の理解を促進する	高齢化に伴う課題についてのワークショップ及び老人ホームでの交流体験(対話、ゲーム、お茶会)を行う。	5週間
カンボジア	ありがとう! 高齢の皆さん	カンボジアの高齢人口の課題についての啓発活動に貢献する	ソーシャルメディアを使った高齢化についてのキャンペーンと4つの対象大学にてキャンペーンを実施する。	3か月
フィリピン	マラウィのためのプロジェクト	高齢者政策についての啓発活動と、家族の関係を強化するための活動を実施する	フィリピンの高齢者と様々な地域の医療的支援についてのセミナーと意見交換会を実施する。	3か月

E. 自主活動

1. テレビ番組(アンダーカバー・アジア)による孤独死の映画

この映画は日本の孤独死の問題を扱う。日本では、推定3万人の高齢者が自宅で孤独死を迎えるこのドキュメンタリー番組は、社会や家族とのつながりの欠如、仕事中心の文化や環境など、なぜ孤独死の現象が起こるのかという重要な問題について問題提起を行う。DGによる自主活動として11月22日に上映され、40人以上のPYが鑑賞した。PYは、人が高齢になるにつれ、家族や社会的つながりを持つことが大切であることを学んだ。これは、健康的な高齢に影響を及ぼすだけではなく、家族中心の責任ある市民になるためにも必要なことであることを学んだ。

2. 日本とASEAN各国における高齢者の写真エッセイ

ディスカッション活動運営委員会のDG4委員は、事前課題で撮影された写真をすべて回収し、船内に展示した。これらの写真エッセイは、日本とASEAN各国における高齢化の概要やエピソードを反映し、すべての人が年齢を重ねる世界規模の現象であることを学んだ。この展示は、船内2階で2週間にわたり行われた。

3. 「誰一人取り残さない」キャンペーン

PYはオンライン上でキャンペーンを行った(#leavenoonebehind)。友人、家族、親戚など、誰かを置き去りにしないという話を共有した。オンライン上にビデオを投稿し、キーとなるメッセージとして、すべての人のための社会を実現するためには、誰もが高齢化政

策に携わる必要があること、子供、生産年齢層、LGBTやHIVに関わらず、年齢、性別、人種、経済状況なども関係がないというメッセージを伝えた。

F. 評価・反省(自己評価セッション)

PYは、世界が高齢化現象の危機的状況に直面していることや、様々な関連課題を早急に解決しなければならない状況にあることを理解した。また、青少年はこれらの課題解決の重要な役割を担っている。

また、PYは、高齢者は社会に貢献できる存在であり、健康的に年齢を重ねた高齢者が、いくつかの課題に対する解決策にも成り得ることを理解した。政府が、高齢者の社会貢献や地域の積極的な担い手としての活躍を通して、彼らの健康を最大化させることは、持続可能な高齢化社会を実現する一つの取組である。

健康的な高齢者人口の持続を可能とするために、政府は健康的な生活習慣に対する啓発を行うべきであり、更には社会的、家族、地域のつながりを強化する必要がある。多世代交流や高齢化についての理解がある地域は、健康的な高齢化に影響を与えることができる。政府は、高齢者の長期雇用を推進し、高齢従業員に対する差別やあらゆる高齢者虐待に対する罰則を強化するべきである。

PYは、変化は自分たちから起こすことができることも学んだ。更に重要なことは、高齢化の問題に取り組むにあたっては、誰もが、どの年齢層の人々も取り残されないように配慮されなければならないことを認識した。これが「すべての人のための社会」ということである。

結論として、政府は、高齢化問題に対して、その場限りに対応するのではなく、常に持続可能な解決策を検討しなければならない。

### G. ファシリテーター所感

自らの地域のために貢献すべく、未来のリーダーたちがリーダーシップスキルや自己研鑽に励む素晴らしいプログラムの一員になれたことは、とても光栄であり喜びである。

この任務を通して再び事業に参加する機会を与えて下さった内閣府、一般財団法人青少年国際交流推進センターへ感謝を申し上げたい。

ディスカッションをファシリテーターとして運営することは、特に今回はテーマも新しく、いつも簡単とは限らなかった。しかし、日々の準備やセッションの運営において、管理部の皆さんに助けられ、大変感謝している。管理部の方々の支援なしにはできなかった。

PYのディスカッション活動に対する姿勢はとても積極的だった。PYには、保健と医療分野から、ビジネス、マーケティング、政治や政府関連、社会と地域活動、そして国際関係に至るまで、様々な分野の専門家が



混在し、彼らの様々な背景や専門性に驚かされた。ディスカッション活動の開始時は、これらの様々な背景を知ることが運営上での課題でもあったが、プログラムが進むにあたって、高齢化問題について様々な視点や角度から検討することを可能とし、強みともなっていた。

PYは、各セッションに対して、周到に事前準備を行い、セッション中は全力で取り組むことでディスカッションに貢献していた。結果として、このDGを教育的なものにただけではなく、楽しく、かつ相互の対話が可能となるインタラクティブなものとなっていった。多くのPYは事前課題に取り組んでいた。苦勞した者もいたが、プログラムの内容や成果に大きな影響は及ぼさなかった。

まとめとして、このディスカッション活動を通して、多くのことを学んだことを述べたい。各セッションでのPYとの充実した時間を過ごすことを通して、高齢化問題に取り組み、社会に変化を及ぼそうとするPYの熱意に感銘を受けた。まぎれもなく、「東南アジア青年の船」事業は、地域において核となって活躍する青少年たちを奮起し、育成するという事業の目的を達成したと言える。



### 主要な概念

#### スキル

- 多文化の環境下で議論や発表をする能力
- 変革理論や論理的なフレームワークなど、計画立案のためのフレームワークを使った問題解決能力

#### 行動

- 多様性のある環境下で働く際に必要な偏見の無さや柔軟さ
- 自らのコミュニティにおける問題を解決するためのリーダーシップや覚悟

### B. 事前課題

#### 個人課題1

- 持続的な開発目標 (SDGs) の目標4と、その7つのターゲットを読み、予習しておくこと。
- 目標4を読んだ上で、自国で7つのターゲットのいずれかに関連している今日の教育課題一つ取り上げて調べ、自身が関心を寄せる問題の現況について、パワーポイント形式で最大3ページのレポートを作成すること。

#### 個人課題2

- 自国の教科書を参照又は調べ、1ページのメモ書きにまとめること。

#### 国別課題1

- 以下の項目についてデータを集め、初回のグループ・ディスカッションの内容に関し3分間のプレゼンテーションを作成すること。フォーマットについては既にパワーポイントで渡してあるが、必ず以下について盛り込むこと。
  - 公教育の制度
  - 初等・中等・高等教育への進学状況及び識字率
  - 自国において学校で用いられる言語と、その言語に対して不自由のある人々

#### 国別課題2

- 自国において学校に通えない子どもについて調査し、その状況に関し、第2回で3分間の発表を行う。(100%の進学率を達成している一部の国については、通常の学校に適應できない子どもについて調べること。) パワーポイントで1~3ページで作成すること。
  - 国名
  - 誰が教育を受けられていないか。誰が学校制度に適應できず学べていないか。
  - 教育を受けられていない、もしくは、通常の学校に適應できない理由とは何か。
  - こうした子どもに教育を受けさせる助けとなる政策や取組にはどのようなものがあるか。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：東京学芸大学附属国際中等教育学校

#### 活動

- 学校の理念、目的、原則、歴史、プログラム、そして国際バカロレア制度を含むカリキュラムや基準についての説明を受けた。
- 実験室での化学の授業を1例、そして英語の授業を2例、合計3例を見学し、異なる教授法や生徒の姿勢について学んだ。
- 2班に分かれて、2種類の英語の授業を見学した。一つ目は、英文学の授業で、ある作品に関して生徒たちと共に様々な角度から内容につき議論したり分析したりするものだった。二つ目は、英語と社会についての授業で、記事にある社会問題について、小さなグループで議論して、その要約を発表するものだった。
- スーパーサイエンスハイスクールの制度を含めた、より詳細なプログラム紹介を先生方からいただき、ラーニングマップ、能力とプログラムの組合せ、ボランティア活動を通じた学びなどについて説明を受けた。
- PYは異なる教室の生徒たちと交流し、自己紹介や自国の教育制度についての発表、質の高い教育についての議論を行った。

#### 視察から学んだこと

- 学校の理念やプログラム、カリキュラムや取組について知り、実際に見学し交流することで、PYは質の高い教育の模範的な実践例を目にすることができた。
- 実際に生徒中心の教授法と学習例、そして生徒がどのように学び反応するかを見学することができた。
- 国際バカロレア・プログラムについて理解し、その3つの特性である質問を起点にした学習、世界とのつながり、概念的かつ分野横断的なカリキュラムを目の当たりにすることができた。
- 論文を書かせることで知識を使わせ、早期から調べものをさせることによって批判的思考を養う「総合的な学習」の実践例を見学できた。
- 分析的かつ論理的に自身の考えを明確に述べて発表する能力のある生徒たちと交流することができた。

#### グループ・ディスカッション1

##### ねらい

- ディスカッション活動全体について理解し、ディスカッションにおける個人目標を設定する。
- 日本での課題別視察について振り返りを行い、学びを深める。
- 教育の持つ正と負の効果両面を理解する。

## (5) 質の高い教育グループ

PY: 43名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの概要

日本及びASEAN各国における教育の現状について理解する。その上で、全ての人々にとって共生的で質の高い教育を確かなものとし、生涯学習を促進するために、青年はどのような貢献ができるかを議論する。

#### b. 期待される成果

- 教育へのアクセスと教育の質の両方の観点からの異なる事例に対して理解することで、日本とASEANにおける教育の今日的課題を学ぶ。
- 背景や見方が異なる他のPYと共に調査・議論することで、懸案となる日本とASEANの教育課題の解決策

をどう企画するか学ぶ。PYは、世界的な教育課題について更なる国際的なものの見方を身につけ、発表や議論についての能力をかん養する。

- 生徒の学びの促進に青年が貢献できること、そして自らのコミュニティにおいていかに教育の包括性・アクセス・質を向上させる一助となり得るかに理解した。
- c. 身につく能力知識
  - 教育へのアクセスや教育の質など、日本とASEAN各国の抱える現在の教育課題
  - 教育の分析に用いるフレームワークや教育における

- d. 参加国における異なる教育の現状について学ぶ。
- e. 質の高い教育について考え、理想的な社会とは何か、そしてそのために教育ができることは何かを考える。

#### 活動

- a. 各自、ディスカッションにおける個人目標を設定した。
- b. 小さな班ごとに分かれ、次の2つの質問に答えることで日本での課題別視察について振り返りを行った。
  - ・視察した学校でのどのような実践を良いと思ったか、その理由は何か。
  - ・何を持ち帰って自分のコミュニティや学校にいかしたいか。その方法についても考え出すことができれば、説明すること。
- c. 5つの参加国が各国の教育制度、進学状況、学校で使用される言語について、概要を発表した。（国別課題1）
- d. 教育の持つ正と負の効果両面、そして質の高い教育とは何かについて議論した。
- e. 理想的な社会とそのために教育ができることについて小さな班ごとに議論し、イメージを掴んだ。

#### 成果

- a. 課題別視察で得られた学びについて共有し、理解を深めた。
- b. 自国における教育の現状について、発表を準備することによって理解し、発表を聴くことによって他国の状況を理解した。
- c. 教育のもたらす影響について更に考えを深めることができた。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- a. 質の高い教育に関する基本的な考え方を理解する。
- b. 質の高い教育について考えを深めるため、教育の目的を定義する。
- c. 参加国における異なる教育制度や現状について理解する。

#### 活動

- a. 小さな班ごとに、教育の目的を定義し、質の高い教育を「目的達成に向けて適格的であること」と定義した。
- b. 6つの参加国が各国の教育制度、進学状況、学校で使用される言語について、概要を発表した。（国別課題1）
- c. 異なる参加国の教育制度に見られる類似点や相違点について共有した。

#### 成果

- a. 前回議論した理想の社会を念頭において教育の目的を設定した。
- b. いくつかのASEAN各国における教育制度について理解した。

- c. 質の高い教育を実現する上での教育的課題について、日本とASEAN各国において多くの類似点があることが分かった。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

- a. 質の高い教育を実現するために教育へのアクセスと公平について理解する。
- b. 参加国における、学校に通っていない子供たちの状況を概観し、解決策を作る。

#### 活動

- a. 教育計画と教育における公平性（平等性とは異なる。望ましい段階に皆が達するため、一人ひとり異なる必要な指導を受ける）の3つの要素についてファシリテーターが概説した。
- b. 各国での学校に通っていない子供たちに関する問題や解決策について議論した。（国別課題2）
- c. 自分の子供に対してどのように教育の機会を与え、また青年としてどのような貢献ができるか、各班が発表した。
- d. 各班において、教科書では男女がどう記述され、文化についてどう書かれているか、気付いたことを共有した。（個人課題2）

#### 成果

- a. 質の高い教育を実現するためには、教育へのアクセスと公平性が肝要であることを理解した。
- b. 学校に通えない子供たちについての根本的な要因について理解を深め、こうした子供たちがどうすれば教育を享受できるかを考えた。
- c. 教科書を読んで気付いた点を共有し、違う立場からは必ずしも公正な記述がなされていないことを理解した。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

- a. 21世紀に求められるスキルを含め、質の高い教育を行うためには何が必要かについて理解を深める。
- b. 異なる様々なスキルを身につけるための授業計画をどのように作成し、実行するかを学ぶ。
- c. SDGsの目標4における7つのターゲットに関する様々な教育問題を理解する。

#### 活動

- a. グローバル化しデジタル化した21世紀において若者が成功するためにはどのようなスキルが求められるか、小さな班に分かれて議論した。
- b. 各班ともスキルの一つを選び、それを培うための授業計画を作成した。
- c. 各班とも、全体に対して模擬授業を行った。
- d. 自らが調べたSDGs目標4のターゲットごとの班に分

かれ、ターゲット（個人課題1）に関連する問題について調べた内容を共有した。そして国が異なっても共通する点は何か議論した。

#### 成果

- a. 21世紀に求められるスキルについて理解を深めた。
- b. PYは、受講者がソフトスキルを培うような双方向的な授業を設計し模擬的に行い、他のPYの反応を観察した。
- c. 班ごとに模擬授業を設計し実施することで、PY同士がぎずなを深める良い機会にもなった。
- d. 他国での教育問題について学び、多くの類似点があることを理解した。

#### ブルネイでの課題別視察

##### 施設：教育省

##### 活動

- 教育省が掲げる、目的、役割、過程、人との結びつき、といった原則に基づき、PYの学びにとって有意義な時間となった。
- a. 質の高い教育を担当する職員が、その考え方や政策について、次のとおりプレゼンテーションを行った。
    - ・「生き生きとした国をつくるための質の高い教育」についての同省のビジョン
    - ・ブルネイの国家哲学であるムラユ・イスラーム・ブラジャ（MIB）。教育を含む全ての政策はこれに基づいている。これは、マレーの言語、文化、慣習、イスラーム的価値観に根差した教え、君主制から成り、国民はこれを尊重し、実践しなければならない。
    - ・1) 質の高い教育への平等で公平なアクセス、2) 教育政策及び省の変遷、3) 重視する21世紀型のスキル、それぞれに対する省の注力

- b. 教育の重要性を理解するため、児童労働についての短い映像を視聴した。
- c. 班に分かれて自分たちのアイデンティティ、教育への期待、自分たちにどのような貢献ができるか、を綴って発表した。（PYたちは他の班の発表について評価を行い、最多得票の班が優勝した）

##### 視察から学んだこと

- a. 平等を実現する上で、教育への公平なアクセスを与えることの重要性。
- b. ブルネイの教育制度がいかにMIBの哲学と21世紀型のスキルを教え込むことに注力しているか。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

- a. ブルネイでの課題別視察について振り返りを行う。
- b. SDGsの目標4におけるターゲットに基づいてPYが

調べた教育問題への解決策を練り、こうした課題に対して自分たちがどのように貢献できるかを考えられるようになる。

#### 活動

- a. 以下の質問に答えることで、小さな班ごとにブルネイでの課題別視察について議論と振り返りを行った。その後、全体に対して意見を共有した。
  - ・ブルネイでの課題別視察において、何が最も好きだったか。
  - ・視察で残念だった点は何か。
  - ・自分のコミュニティにどのような考えを持ち帰っていかすことができるか。
- b. SDGsの目標4における自ら調査したターゲットに基づいて班に分かれ、各班は一つの国における一つの文脈から一つの問題を選んだ。
- c. 選択した教育問題を説明する1名のPYを除き、全ての班が巡回して解決策を考えた。
- d. 提案された解決策に基づき、各班で変革の理論を練って、理想的な未来像や変化への段階について考えた。

#### 成果

- a. 全てのPYが集まって、各国の教育問題について議論し、共通問題を見つけたことで、参加国の現況について更に知ることができた。
- b. 全員が他国の問題に対して考えや知識を持ち出し協働した。
- c. 各班（合計6班）とも選択した問題に対して変革の理論を立て、理想の未来像とそれに向けた段階を描いた。
- d. 巡回方式をとったことで、PYは他のPYと混ざり合い、発表者やその国についてこれまで以上に知ることができた。

#### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

##### ねらい

- a. 質の高い教育に関するテーマについて、社会プロジェクトの企画案を出し合う。
- b. 詳細な段階についても盛り込んだ、社会プロジェクトのための提案書を書く訓練。

##### 活動

- a. DG5の代表者数名からプロジェクト・マネジメントの経験について共有を行った。
  - 1) Rachmat（インドネシアPY）：地元生徒たちに向けた教育プロジェクト
  - 2) Marky（フィリピンPY）：コミュニティの活動に対して地元青年がもっと積極的になるよう促す赤十字のプロジェクト
  - 3) Buddy（ベトナムPY）：「ラ・ラ・ランド」－ホーチミン市ゴープップ区にある「ラ・パゴダ」

- で開催している、生活上のスキルについての講座
- b. 事後活動の企画とプロジェクト・マネジメント・ワークショップの後、前回に練った変革の理論を用いて各班でプロジェクトについて議論し、企画した。これには、プロジェクトの概要、背景、現状分析、管理及び評価計画が盛り込まれていた。
- c. 企画を練った後、各班ともどのようなプロジェクトを考えているか他の班と共有し、他のプロジェクトについて耳を傾け、質疑を通じて考えを明確にしていった。

#### 成果

- a. PYは他のPYが持つプロジェクトの経験を聴くことで刺激を受けた。
- b. 6班ともプロジェクトの企画案を練った。(詳細については後述)

#### D. 決意・期待される今後の活動

PYはプロジェクト・マネジメントのセッションにおいて6つの企画案を立てた。SDGs目標4における7つから選んだターゲットに基づいて分かれた班ごとに起草された。

- 1) 「ラオスにおける非公式教育」のプロジェクトは、農村地域の学校に通えない子供たちに向けて非公式で教育を提供することを目的にしている。ボランティアを募り、農村地域において非公式ながら読み書きを教えるものである。これは、国際的NGOと手を組んで、政府に無料の教育を広げるよう働きかけることも視野に入れている。(SDGs目標4、ターゲット1)
- 2) 「未来のための教師たち」というプロジェクトは、フィリピンにおける持続可能な初等教育のために教師たちに教授法の練度を高めてもらうための訓練講座を提供するのが目的である。(SDGs目標4、ターゲット2)
- 3) 「技術教育及び訓練並びに職業教育及び訓練(TVET)インフォメーション・クラス」というプロジェクトは、TVETの重要性を知らしめ、農村地域の生徒たちに対して有用な職業訓練の情報を提供することを目的とする。(SDGs目標4、ターゲット3)
- 4) 「キャリア・セッション」というプロジェクトは、学校に通う生徒に対し学習してキャリアを積む動機付けをすることが目的である。ボランティアが高校生を対象にしたキャリア講座を開く。(SDGs目標4、ターゲット4)
- 5) 双方向的な活動やワークショップを用いた「バス」というプロジェクトは、ベトナム・ビントゥアン省にある農村地域の生徒に手を差し伸べて、より目をかけられているように感じさせ、より強く動機を持たせ、平等に質の高い教育へのアクセスを持たせる

- ことを目的とする。(SDGs目標4、ターゲット5)
- 6) “Care to read, Love to write”というプロジェクトは、教師と生徒の両者を対象とするトレーニング・センターを設立することで、生徒の読み書き能力を継続して向上させることを目的とする。(SDGs目標4、ターゲット6)

#### E. まとめ

##### ねらい

DG5がディスカッションの時間を通じて成し遂げたことにつき振り返り、総括する。

##### 活動

- a. 小さな班ごとに、質の高い教育とは何を議論し、質の高い教育において教育者が携えるべき10の要素を抽出した。
- b. 各自、自らのコミュニティにおける質の高い教育に対しての所信表明を書き出し、2名一組で共有した。
- c. それらを用いてコミットメント・ツリーを作成した。

##### 成果

- a. 全員で各回に何が議論されたかを振り返った。
- b. 一人の教育者が、いかに質の高い教育を提供できるかについて各人が学んだ。
- c. 質の高い教育に関してどのような行動を起こすのか意見交換し、他者の話を聴くことで触発された。

#### F. 評価・反省(自己評価セッション)

##### ねらい

ディスカッションを通して何を学んだかを理解し、事前に設定した目標をどれ程度達成できたか評価する。

##### 活動

- a. ディスカッションについて初回に立てた自らの目標を確認し、各自でどれほど達成できたのか、何を得たのか、そして学びを事後活動にどうかすのかに関し振り返りを行った。そして、3名一組でそれらを共有した。
- b. ファシリテーターは、既参加青年として「東南アジア青年の船」事業がいかに自身の人生を変えたのか話し、これまでとは異なる物事を経験し、自らの興味関心に従って突き進むことを説いた。
- c. PYはDGの仲間たちに対して感謝の言葉を綴った。
- d. ディスカッション・セッションの評価について記入した。

##### 成果

- a. 振り返りと意見交換を行うことで、DGを通じた成果について理解し、学びを深めるに至った。
- b. (特にキャリア志向の)PYの中には「東南アジア青年の船」事業によってキャリアを変えたファシリテーターの話に触発された者も見られた。

- c. 感謝のメッセージ交換により、より互いの距離が縮まったように感じられた。

#### G. ファシリテーター所感

初めに、本ディスカッションの実現に尽力くださった、内閣府、NL、管理部門、他グループのファシリテーター、にっぽん丸乗組員の皆様に感謝の意を示したい。

また、本グループのPYのオープンさ、寛容さには非常に感謝しており、ディスカッションを楽しんでいた様子には大変励まされた。ファシリテーターとしても、PYの創造性、情熱や才能から感銘を受けた。特に、最後のディスカッション結果のプレゼンテーションについては、クリエイティブ、かつ内容も示唆に富んでいて素晴らしいかった。また、プレゼンテーションの場では、PY全員が互いに協力し合い、全員がステージに立てたことは、このDGの特筆すべきところである。

本DGは、東京学芸大学附属国際中等教育学校への視察で初めて顔を合わせ、そこで非常に高い質の教育を提供する現場を視察できた。その結果、PYは初めに目指すべき学校教育の姿について、イメージを持つことができた。

それに続く船内でのディスカッションでは、教育の目的を定義するための議論から始め、PYによるプレゼンテーションを通じ、各国の教育事情について理解を深めた。その後、質の高い教育を提供するためには、全員が目指す習熟度を達成できるよう、個人々に合ったものを広く公正に提供することが必要であるという、教育へのアクセスからの観点について考えた。この公正さという考え方は、教育の質の向上のためにブルネイの教育政策の中で目指されており、ブルネイにおける教育省の訪問でもその重要性を学んだ。さらに、ディスカッションでは、教育の質を考えるにあたり、個人が社会で活躍するために必要なスキルを育成する授業計画を作成し、グループ内でシミュレーションを行って理解を深めた。それから、各人が持ち寄った、各国における教育課題についてシェアして、課題に対する解決策をグループごとに考案した。最後にどう各人が自国において、質の高い教育の実現に貢献できるか宣言することで、事業後の生活につなげることにした。

本ディスカッションでは、PYは、各国の教育事情や課題について共有することに時間を費やしたが、当事国の人から、その地の事情を聞くことができて、PYは教育課題により強い興味を示していた。また各国の教育事情は、多々異なる一方で、共通する課題も多いということに気づき、課題解決のために協働できることがあるということを認識したPYが少なくなかった。他方、質の高い教育というと、より効果的に知識やスキルを習得するための教え方等の技術的なことに関心が行きがちであるが、一方でその実現には、広く公正に教育を提供する

必要があるという概念的な視点に共感するPYも多かった。概念的な話は避けがちだが、新たな視点を持つことができたということで、重要であったと感じている。

なお、本ディスカッションにおける課題は、文化・経験値ともに非常に幅の広い40名以上の大人数のPYが一堂に会したため、PY間で均等に話をするのが難しかったということである。誰もが教育に関する経験を持ち、何かしら意見を持っているものの、教育に対する理解度及びディスカッションに期待するものの差が非常に大きく、焦点を定めるのが非常に難しかった。具体的には、教員であるPYと学生とでは背景が大きく異なるだけではなく、参加国間の教育事情の差が非常に大きく、各人の持つ教育観が大きく異なっていた。

また、今回ファシリテーターを務めての反省点は、私の過去の経験の違いから、PYが望むほど、インタラクティブなセッションには作り上げられなかったということである。ディスカッションは、設計やガイダンスから、PY間で状況や概念的なアイデアの共有をするところに留まり、なかなか当事者意識を持って、議論をするところまで十分持っていくことができなかったと認識している。もし私が再度ファシリテーターになることがあるならば、今回はPYが実現できるアイデアを作り、異なる観点を学べるよう、ケーススタディもしくは、より実践的な活動をベースとしたものにしたい。

また、今回の個別のディスカッションのプログラムの設計とは別に、現状の事業におけるディスカッションの枠組みについても、改善できる箇所が多々あると実感した。今後は、PYが、ディスカッション結果である自分たちのアイデアを外部の専門家に対して発表し、フィードバックをもらう機会を設けることを提案したい。そうすることで、PYのモチベーションや学びも最大化されると考えられる。現状のディスカッションの目的は、事後活動につなげるためのアイデア、インスピレーションを得る場ということとなっており、ディスカッションの結果を直接評価されることはない。結果を他グループに対して発表をする機会があっても、提案内容を査定されることはないので、実際のところPYがディスカッションに注力する必要はそれほどなく、他の活動を優先する傾向があるように思われた。

もしディスカッションを外部に発表する機会が設けられれば、事業全体におけるディスカッションの活動割合を高める必要がある。具体的には、より専門的なプレゼンテーションを準備するため、ディスカッションにかけられる時間を10セッションくらいに増やし、各訪問国での施設訪問を全てディスカッション・テーマに関連づけるのが良い。いくつかの課題別視察はテーマについてのインプットを得る場とし、いくつかはPYがその国の専門家に対し、自分たちのアイデアを発表する場とすると良いと考える。

さらに、ディスカッション・セッションの質を担保するためには、ファシリテーターへのガイダンス、フィードバックをより強化する必要がある。現状はプログラムを作成する過程でフィードバックは与えられるものの、基本的には個々のファシリテーターの裁量に任されている。その一方で、現状ファシリテーターの経験や能力が個人によって大きく異なっており、すぐに事業に合った適切なプログラムを作り上げるのは必ずしも容易では



ない。PYの学びをより大きくするためには、ファシリテーターに対する更なるサポートが必要であり、過去のファシリテーターからのベストプラクティスなどの知見の共有が有効である。

最後に、ファシリテーターとして本事業に関わる機会を与えてくれ、才能に溢れるPYに関わるきっかけを作ってくれた内閣府に再度謝意を示したい。



## (6) レジリエントで持続可能な都市づくりグループ

PY：35名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの概要

日本とASEANにおける物的インフラ、環境変動、人々の生活水準、災害についての現状と課題を理解する。その上で、レジリエントで持続可能な都市づくりに向けて青年はどのような貢献をできるか議論し、触発を受ける。

#### b. 期待される成果

- レジリエントで持続可能な都市づくり、またこれに向けた日本とASEANによる取組の現状と課題について知識を得て、意識を醸成する。
- PYは感化され、事後活動の一環として各自のコミュニティにおいてレジリエントで持続可能な都市づくりに向けた貢献を行う。

#### c. 身につく能力

- 知識
  - 以下についての理解を深める。
    - レジリエントで持続可能な都市づくりに関連した用語や概念
    - 災害管理の国際的及び地域的枠組み
    - レジリエントで持続可能な都市づくりに向けた日本とASEANによる取組

#### スキル

- 批判的・分析的思考
- 人前で自らの考えを発表できる能力

- レジリエントで持続可能な都市づくりに関した実現可能なプロジェクトを練り上げる能力

#### 行動

- レジリエントで持続可能な都市づくりの重要性により一層意識的になる。

### B. 事前課題

#### 個人課題

- 質問表に回答を記入すること。これは、レジリエントで持続可能な都市づくりの文脈でよく用いられる概念や用語を知るのに役立つ。
- ディスカッション・セッションの準備として4点の課題図書を要約すること。
  - 持続可能な開発目標（国連）
  - 仙台防災枠組2015～2030
  - ASEAN防災緊急対応協定（AADMER）
  - 気候変動抑制に関するパリ協定

#### 国別課題

- 自国の都市部（首都が望ましい）についての概要をまとめること。その際、以下について盛り込むこと。
  - 地図
  - 社会的側面、環境的側面、経済的側面の3要素
  - 脆弱性の要因
  - 都市の有する対応能力

- 直近起こった災害：場所、原因、交通インフラや生活環境といった社会・経済・環境的な影響、被害や米ドル換算での損失
  - 災害への対応
  - 課題及びその対策
- 自国のレジリエントで持続可能な都市づくりに関した最優良事例に関する報告を見つけること。以下のいずれかの形態をとること。
    - パワーポイントによる発表
    - プロジェクトの図と概要が書かれたA4サイズのポスター

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：三井不動産株式会社

#### 活動

- 北原義一代表取締役副社長執行役員やその他役職者から沿革やプロジェクト、今後の計画、減災についてお話をいただいた。
  - 会社が所有しているレストラン、わたす日本橋にて昼食をとり、美味しく健康的な食事だけでなく、直接副社長と話すことで、いかにレジリエントで持続可能な都市を設計するかについての会社のビジョンや目標に関して、より情報を得ることができた。
  - 社員による、現在のプロジェクトや今後の計画に関するプレゼンテーション。
  - 社員とPYとの意見交換。
- 視察から学んだこと**
- エネルギーの供給には非常に先進的な技術が使われていた。送電とガスという2通りからの供給を行うコージェネレーションというシステムが使われていた。
  - 災害に因る被害を抑え、減らすためには、準備と明確な災害管理の計画が重要であることを理解した。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

- DGの目標、期待すること、ルールを設定する。
- 課題別視察で何を行ったか振り返る。
- レジリエントで持続可能な都市づくりに関しての用語や概念について理解する。

##### 活動

- DGを通して何を達成したいかを話し合い、DGにおけるルールを設定した。
- 4つの班に分かれて、日本での課題別視察から何を学んだかを議論した。
- 各班の代表者がその結果について共有を行った。

##### 成果

- 5回のセッションとも異なる議事録担当を国単位で決めた。
- 議事録担当の仕事

- 各回において共有された考えを書いて記録する。
  - 例えばパワーポイント資料やビデオ、写真など、必要となる物をすべて集める
- DGが毎回どのように運営されていくべきかについての議論。
    - 内容と目的
      - PYが感化されて各自のコミュニティに活用できるよう、レジリエントで持続可能な都市づくりに関する物事についての知識や意識を得られる場となるべきである。
    - 手法
      - 毎回始まる前に、創意を凝らしたおさらいを行う。
      - より参加度が高まるよう、小さな班に分かれた議論を行う。
      - ロールプレイなどの、クリエイティブな発表を行う。
    - 自発性
      - 積極的に協力し意見交換する心構え。
      - より一層、傾聴する。
      - 自ら主体的に動きながらも、チームワークの精神を持つ。
      - 否定的なことにすら先入観のない広い心を持つ。
      - 考えや自信を築く。
  - 日本での課題別視察：多くの者が言語面で不便を感じ、幾つかのプレゼンテーションでは視覚情報が欠けていた。
  - 色々な定義について学ぶ時間が設けられた。また、テーマについてPYの理解度を測った事前課題の統計結果が発表されたが、ほとんどの者がテーマについて詳しく知っているわけではないことが分かった。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

- 日本とASEANにおける都市の概要を理解する。
- レジリエント度合の測定方法を理解する。

##### 活動

- 日本とASEANにおける都市の概要を地図に示した。
- 持続可能性の経済的、社会的、環境的要素に照らして各都市の違いについて見つけ議論した。
- 「いつ、どこで、誰が、何を、なぜ、どのように」という質問を用いての議論
- PY個々人の想定に基づいて、国の脆弱性（気候、危険、環境、資源、コミュニティ）と適応力を査定した。

##### 成果

- 経済的、社会的、環境的側面からの類似点や相違点を見つけた。また、国は比較を容易にするためグループ分けされた。

グループ・ディスカッションIII

## ねらい

- レジリエント度合がどう測定されるかを理解する。
- 持続可能性の3本柱について理解する。

## 活動

- 班分け（異なる国から成る6名一組で5班）
- レジリエントな都市についての基本的な知識の共有
- 異なる国における持続可能性の3本柱のバランスについての事実共有

## 成果

- レジリエントな都市とは何か。
  - 有事から回復する能力
  - 原則：低い脆弱性、高い適応力
  - 人為と自然状況との両面から絶えず変化する状況への適応や調整能力
- 何が重要か。
  - 資源の保守
  - 市民の安全や健康の保全
  - 経済の安定
  - 都市の機能保持
  - 次世代の命を守る
  - 減災のための努力
  - 2050年までに都市化は80%まで増加する
  - 財務損失を抑える
- 誰が責任者で誰が受益者か。
  - 民間、NGO、その他：知識・投資・専門性
  - 政府：政策を実行する政治家、都市計画担当者
  - 市民：参加と協力
  - 受益者：全員
- どのような時に、レジリエントな都市と呼べるか。
  - 被害者が極めて少ない
  - 経済への悪影響が少ない
  - 施設やインフラへのアクセスが容易にできる
- どの領域に注力すべきか。
  - 地理的：地震や津波で被害を受けやすいところ
  - 責任：全員が持つこと
  - 努力のしどころ：復興のための総合計画、政策
  - 全領域
  - 記録
  - 政府から個人へ
- どのようにレジリエントな都市を設計するか。
  - 脆弱性への検討（真因と過去の調査）
  - 初期の予備的計画
  - 適応力に向けての計画
  - 総合計画
  - 責任の分担
  - 緊急時の予算：国家による準備金
  - 全員に対して働きかけ、気をかける
  - 信頼度の高い緊急警報システムと訓練

- 事例研究：【フィリピン】学校やオフィスにおいて、災害時どこに避難し留まれば良いか、年に2～3回、5つの訓練が義務付けられている。【気候面でのスマートシティ】化学肥料を減らし、気候変動を抑える
- 持続可能性の3本柱のバランスをどのようにとるか：ASEANにおいて抽出した国の事例
  - ラオス：
    - 経済
    - 外資：中国
    - 世界銀行からのインフラのための予算
    - 独立行政法人国際協力機構（JICA）からの資金
    - 社会
    - 教育：多くの機関、奨学金（フルブライト）、不十分な施設や予算、識字率99%以上
    - 医療・健康管理：信頼度が低い、質が低い、衛生的でない。ベトナムとタイ資本がラオスにおいて病院を開設。
    - 寿命：年配者は専ら在宅の状態
  - フィリピン：
    - 経済
    - 海外で就労している者からの資金（OFW: Overseas Filipino Worker）
    - 概して、輸出入が主要である。
    - 外貨準備：1997年から1998年のアジア通貨危機や世界の経済危機の最中とその後について
    - 社会
    - 市民の力：政府に訴えるための公共デモが許されている。

グループ・ディスカッションIV

## ねらい

- レジリエントで持続可能な都市の例について知る。
- レジリエントで持続可能な都市づくりの取組について明確なイメージを持つ。

## 活動

- ファシリテーターによる講義
- 講義中に使用したビデオについての質疑応答
- 日本PYによる、東京都のスマートシティ、そして日本の災害管理についてのプレゼンテーション
- シンガポールPYによる、自国での持続可能な都市の取組についてのプレゼンテーション
- 日本PYとシンガポールPYとの質疑応答

## 成果

- 講義：レジリエントで持続可能な都市づくりについてのビデオを視聴した。ビデオは、交通渋滞、干ばつ、気候変動といった問題を扱ったものだったが、レジリエントな都市をつくるためには、上からも下からも全ての利害関係者による尽力が必要となり、

それが市民の福祉につながる。そして、それはお金よりも優良な生活状況から来るものである。

- 日本PYによるプレゼンテーション
  - プレゼンテーションは、「3.11」と呼ばれる2011年の東日本大震災と津波という大災害、そして東京都のスマートシティについてであった。
  - 災害時、特に震災時における日本の警報システム
  - 東京都は災害対策のための訓練を年1回行っている。
    - 災害時に必要な手立て
      - 避難場所
      - 臨時の商店
      - 計画停電（地熱・太陽光エネルギー）
    - 災害に関して将来必要となる手立て
      - 外で足止めを食らった者に対して「すぐに家へ直行しないように」するための手段
      - 災害リスク・マップ「木造家屋が密集した地域」
      - 柏の葉スマートシティ：
        - 環境
        - 節電
        - 災害
        - 再生可能エネルギー
        - スマート・グリッド
        - 持続可能な設計
        - 植物工場
        - 電力管理システム
        - 災害時におけるスマート電力システム
        - 再生可能エネルギー、蓄電、地下水から3日間、60%の電力供給が可能。
  - 新しい産業
    - オープン・イノベーション・ラボ
    - 起業支援
    - リサーチ・ファクトリー
    - ビジネス・コンテスト
  - 健康な暮らし
    - デジタル・ヘルス機器
    - 健康増進プログラム
    - 学術機関
    - 街のヘルス・ステーション
  - 協働
    - 産官学
- シンガポールPYによるプレゼンテーション
  - シンガポールPYは、自国における持続可能な都市の取組について共有した。シンガポールは、世界の持続可能な都市ランキングで4位に位置する。
  - シンガポールにおける持続可能な交通、地下鉄や都市を走る車両数の制限、日曜日に車を運転しない国を挙げてのキャンペーン。

- 相乗りや電気自動車、自転車シェアするプラットフォームも存在する。
- シンガポールの大胆な都市管理：市民の見方や報告を受ける、政府の誠実な対応とコミュニティ団体や公共への関わり合い。
- 投資を呼び込み雇用を創出する競争力ある経済、高い生活水準や持続可能な環境といったシンガポールの実績
- シンガポールは総合的なゴミ管理の取組とエコ・スマート・タウンによってゼロ・ウェイスト（ゴミを出さない）の国家となることを企図している。

ブルネイでの課題別視察

## 施設：開発省水上集落

## 活動

- 本土から現地までのポートツアー
- 地元行政によりつくられた当地についてのプレゼンテーション
- 地元住民の住環境を調査するための視察
- 経験談を伺いながら、現地の美味しい食事をいただいた。

## 視察から学んだこと

- 将来の持続可能性に向けた当地の開発
- 吸引により行うゴミ処理

グループ・ディスカッションV

## ねらい

- ブルネイでの課題別視察の振り返りを行う。
- 日本とASEANにおけるレジリエントで持続可能な都市づくりの取組について理解を深める。

## 活動

- 視察についての感想を集めた。
- 最優良事例について、ラオス、ベトナム、フィリピン、タイからの国別プレゼンテーションを行った。

## 成果

- ラオスのプレゼンテーション
  - どうして最優良事例と呼べるのか。
  - 回答：交通渋滞の問題を解消しているため。
  - 課題は何か。
  - 回答：1.円滑な公共交通を達成する
  - 2.決まったバス停にバスが止まらない
  - 3.公共交通を利用しようという人々の意識
- 何を改善するのか。
  - 回答：1.大学生を教えるための教育制度
  - 2.バスの経路を増やし、待ち時間を減らす（現在の待ち時間は15分から1時間）
  - 3.バス停で止まるようにバス運転手を教育する。
  - 4.決められた場所に駐車するようバス運転手を教

育する。

b. ベトナム：

- どうして最優良事例と呼べるのか。

回答：1. 高い生産性を達成しながら大気や水質汚染がない  
2. レジリエントにするための意識が高い  
3. 環境保全のため法律が厳しい

- 課題は何か。

回答：都市化の進行によって、現地がベトナムの次の大都市に変容し、現在ある特性が失われてしまう可能性。

- 何を改善するのか。

回答：政府に対して青年が、ダナンの都市化について懸念を表明する。

c. フィリピン：

- どうして最優良事例と呼べるのか。

回答：1. 気候・災害リスク査定のための適切な計画や標準手順（SOP）  
2. 総合的な土地の利用計画  
3. テキスト・メッセージによる早期警報システム  
4. 一般から意見収集することで被害を減抑するのに役立たせる政策やオンライン・プラットフォーム

- 課題は何か。

回答：1. 情報を普及するための、より強いインターネット接続

- 2. 費用がかさむ。

- 何を改善するのか。

回答：フィリピン中、マニラ中で良いインターネット接続が提供でき利用可能となる。

d. タイ：

- どうして最優良事例と呼べるのか。

回答：チェンマイは教育制度の整った比較的小さな都市・小さな人口のため、管理が容易である。

- 課題は何か。

回答：チェンマイは、災害時の連絡が難しく、スマート・シティの技術を活用する上で問題を抱える。

- 何を改善するのか。

回答：連絡系統と、体系的な監視カメラの管理体制の改善。

### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション ねらい

a. 事後活動の企画と実施

b. っぽん丸船内でのDG6によるキャンペーンの目標設定

#### 活動

a. っぽん丸において、持続可能性を有するものとしてでないものについて議論

b. キャンペーンの班ごとに予定と目標について議論

c. 各班の計画を全体に共有

#### 成果

キャンペーンについて3班に分かれた。

1. 食品の無駄について

食品の無駄と、食べ物の包装については再利用するという意識を向上させる。再利用と、ごみの粗雑な廃棄防止をPYに促す。

2. 洗濯機の効率的な使用

最良の洗濯機の利用法についてPYの意識を向上させる。使用する洗剤の量を減らす。

メールボックスへの紙の使用を減らす。紙について、効率の良い利用をする。

#### ゴール

っぽん丸にある資源の効率的な利用を通じて、持続可能性のある生活と環境にやさしい航海を促す。

#### 実施

- 船内における国別のミーティングでは、（管理部カウンター又はコンフェッション・ボックスの近くに）用意されている箱から再生紙を取って使用するようPYに向けて釘をさす。
- ランドリー・スパイとして、過剰に洗剤を使っているPYがいなか見張る。

#### D. 決意・期待される今後の活動

何度も回を重ねて議論したことで、未来に向けた各国におけるレジリエントで持続可能な都市づくりの重要性についてPYは理解を深めることができた。ただ災害からの立ち直りが早いだけではなく、次世代に向けて豊かであり続けるような都市を実現するために、都市づくりの考え方がいかに使われるかについてより多くの示唆を得た。

船内生活に関して、環境に優しい航海に向けて資源を有効利用するよう全てのPYに対して意識喚起を行うための策を、DG6のメンバーは練り上げた。たとえば、再生紙の使用、食べ物の包装の再利用、節電節水のための洗濯における適正量での洗剤使用、といった3つの取組を行った。

全てのPYに対してDG6のメンバーがキャンペーンを先導し、上述の課題について改善効果が出るまでに至った。

船上生活においてのみならず、帰国後も、環境保護の考えを持ち続けることを我々、そして他のDGにおけるPYもが約束した。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

ディスカッション活動の最後には、プログラムの冒頭から全ての活動に対して振り返って、自己評価を行った。PYに対しては、この旅を経て何を学んだか、特にレジリエントで持続可能な都市づくりを題にした議論か

ら何を学んだか、を書くことが求められた。

テーマに関して非常に多くの知識を得ることができ、課題別視察に加え、PYの中にはこの分野に明るい者もいたため各国のプレゼンテーションからも驚くほど多くを学ぶことができたとの自己評価がなされた。また、PYは他者に対する交渉や傾聴、考えの伝達などに関し、新しくスキルを得ることができた。さらに、自己の成長においても大きな進歩を見せた。自分の持つ間合いを飛び越えてみることで自信を増し、これまで以上に自分のことをさらけ出し表現することができたとはPYの言である。

ただ学ぶだけではなく、新しい友人や経験を得ることができたので、PYは幸せである。

PYは、環境保護の船上生活での意識喚起キャンペーンの一員となれて嬉しいと言ってくれた。

さらに、ファシリテーターはPYに対して、この事業に参加する前の自分に宛てた手紙を書かせることで、振り返りを行わせた。そこでは、船内のディスカッション活動に際して準備万端となるために知ってほしいことや助言が綴られた。

最後に、PYはこの旅の一員であることを誇りに思い、また自分たちのことのみならず、自らの家族、友人や国といった全体に対しても誇りを持った。



#### F. ファシリテーター所感

まず何よりも、私に第45回「東南アジア青年の船」事業に関わる機会を与えてくださった内閣府に感謝の意を表したい。私の人生を様々な形で変えてくれたこの事業に再び加わることは、実に嬉しいことであった。

レジリエントで持続可能な都市づくりというテーマは昨年度から始まったもので、昨年度も私がファシリテーターを務めさせていただいた。例年どおり、文化、教育、地理、職業などの観点から見ても多様な背景を持ったPYが集まった。それだけでなく、毎度ファシリテーターの悩みの種となるのは、ディスカッションの時間を通してどのようにPYの期待に応えるか、である。

これに対し、PYは実に積極的に考えを伝え、経験を共有し、鋭い議論を展開してくれた。それだけでなくPYは船内でもより持続可能な環境を作り上げるために一大プロジェクトを企画し、これは帰国後にそれぞれのコミュニティにおいても役立つものであった。

終わりに、この事業を成功に導いた全ての関係者の皆様に心からの感謝を申し上げることで私からの挨拶とさせていただきます。本事業は、より一層の恩恵を次世代の若者一人ひとりのみならず、そのコミュニティに対してまで与えていくものであると確信している。



## (7) ソフト・パワーと青年の民間外交グループ

PY：40名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの概要

「ソフト・パワー」は、軍事力や経済力であるハード・パワーとは異なり、自国の有する文化や価値観に対する支持や共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得し得る力のことでありと定義されている。自国の強みや魅力を見出すことに関し、またソフト・パワーを伴った国際社会への参加に関し、青年がどのような貢献をできるか議論する。

#### b. 期待される成果

- 日本とASEANの経験と現実という文脈におけるソフト・パワーと青年の民間外交について理解を深める。
- ソフト・パワーを反映する主要な文化的能力を發揮し、感受性、寛容さ、多元性への尊重、時には競争、アイデンティティや日本及びASEANにおける社会の利益といった事柄を含む青年の民間外交を促進することができるようになる。
- 自らの文化を映し出し、日本とASEANの青年における民間外交を促進するような現実的かつ実践的な企画を立てられるようになる。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- ソフト・パワーと青年の民間外交についての話が理解でき、日本とASEANの若者が抱える問題を対処する上でソフト・パワーと青年の民間外交を応用させる手立てや方策について知っている。

##### スキル

- 民間外交の土台を築き先導して、異文化間の対話や日本とASEANの若者同士の理解を促進する。

##### 行動

- 敬意、思いやり、日本とASEANにおける文化の違いへの尊重を持つことができる。自分の強みに立脚して障害を乗り越え、日本とASEANにおける青年の民間外交を推し進める施策を企画できる。

### B. 事前課題

#### 個人課題

- 自らの国家・民族への帰属意識を個人的に感じる物を家から持参してくる。なぜそのような感じられるかを話すことになる。初日の導入部分で用いる予定である。
- 最低3名の同じコミュニティ、学校、職場の外国人と話をし、以下について聞いてくること。
  - PYの国の文化のどのような面（芸術、メディア

ア、食べ物、制度、技術、取組、等）であれば、外国に容易に受け入れられると思うか。

- PYの国の文化のどのような面が、容易に外国人を惹きつけると思うか。

#### c. 課題図書

- ジョセフ・ナイ『ソフト・パワー：21世紀国際政治を制する見えざる力』（2004年）1～17ページ
- The Art of Soft Power: A Study of Cultural Diplomacy at UN Office in Geneva by Kings College London (2017年) 11～26ページ
- Tracks of Diplomacy
- Track One and a Half Diplomacy and the Complementarity of Tracks by Jeffrey Mapendere published at Culture of Peace Online Journal (2010年) 66～69ページ

#### 国別課題

- 次の課題図書を読み、理解してくること。

- ジョセフ・ナイ『ソフト・パワー：21世紀国際政治を制する見えざる力』（2004年）1～17ページ
- The Art of Soft Power: A Study of Cultural Diplomacy at UN Office in Geneva by Kings College London (2017年) 11～26ページ

- 国際的な規模でソフト・パワーや若者の民間外交を用いた取組や活動の例を示したポスター又はビデオを作成すること。特にPYが実際に関わったものが望ましい。このポスターやビデオは、第3回における討論で重要となる。作成の際には、以下の情報を盛り込むこと。その取組や活動はどのような性質のものか。何を達成することが目的か。何によって他との差別化がなされているか。どのような面で成功したといえるのか。遂行する上で何が課題だったか。もし自分がこの取組や活動を主導するとしたら、どのように異なる手法を取るか。ポスターやビデオは以下に従うこと。

- ポスターは1.5 m x 1.5 mを超えないこと。
- ビデオは3分以内であること。
- ポスターやビデオについて5分間のプレゼンテーションを行い、その後議論に入ることになる。

最も創意工夫に富んだポスターやビデオを選出する予定である。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)、東洋大学

#### 活動

- 東洋大学と、その国際教育への取組について学んだ。学生向けのプログラムの海外との連携について学んだ。
- GiFTがどのようにソフト・パワーを用いて、異なる問題を抱える複数の外国を支援しているかを知った。物語形式で行われた。
- より良い社会を作るのが目標のSDGsゲームを行った。時間や経済的・技術的資源の制約の中、環境、経済、社会問題の間でどうバランスを取るかを考えた。

#### 視察から学んだこと

- 課題別視察では、教育の場においてソフト・パワーと民間外交がどう用いられているかを非常によく知ることができた。
- SDGsについて知り、目標達成のためにチームでどのように動くべきかを学んだ。
- 長期にわたる国際的な目標を戦略的に達成するためには、交渉やコミュニケーションといったスキルが必要だと実感した。

#### グループ・ディスカッションI

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- ソフト・パワーと民間外交についての基本的な考え方や、そして日本とASEANの若者との関係について理解する。
- 日本とASEANから集まった他のPYに目を通すことで、自国の文化の強みやアイデンティティについて認識することができる。
- 日本とASEANにおけるソフト・パワーと民間外交を用いることの機会と課題を見出す。

##### 活動

このセッションでは、物語形式で伝える手法を紹介し、他者の話から相手を理解することを行った。小さな班別に、（個人課題aとして）持参した物を使って自身と自分の文化について紹介を行った。

外交の一要素としてのソフト・パワーと民間外交について今日のようなことが言われているか目を向けた。その一環として、国際関係の中で形作られてきたパワーの性質、ソフト・パワーや民間外交という考え方の源流、国際政治の枠組みにおける文化の持つパワーについて短い講義を行った。ここでは、ジョセフ・ナイによる研究や、外交の他の要素についての課題図書について議論が行われた。

「氷山としての文化」モデルと、行動や態度を解釈する際の見方について紹介した。このモデルを用いて、この回では、良しにつけ悪しきにつけ、外国人嫌いや固定

観念など、他者を差別するのに文化がどう引き合いに出されるかを問題とした。

最後に、日本とASEANにおける人々の関係性を前進させることにソフト・パワーと民間外交が資する中、この地域の火種となり得る問題をPYは見つけた。それらは、次のとおりである。

- 文化的な誤解、異文化への嫌悪、文化の保全
- 広がり続ける格差や貧富の差、貧困、若年層の失業、漁業の衰退傾向
- 政治的多様性、人種・宗教への不寛容
- 社会的孤立、いじめ
- 男女の不平等
- 領土問題
- 教育
- 高齢化

#### 成果

- PYはソフト・パワーについての話題、理論や実践について詳しくなった。
- 外交のタイプと、トラック1、2、3の違いについて理解した。
- 相互理解を可能とするために、個人的な体験談を用いた物語形式での伝え方を練習した。
- 日本及びASEAN各国における更に広範な問題を解決するソフト・パワーと民間外交の潜在的な用い方を理解した。

#### グループ・ディスカッションII

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- ソフト・パワーと青年の民間外交を示す異なる手法や方策に詳しくなる。
- 日本とASEANの若者による異文化間対話やコミュニケーションの価値や力について理解する。
- 日本とASEANにおける文化の微かな違いを扱う繊細な感覚を養う。
- 真の異文化間対話を可能にするコミュニケーション能力をかん養する。

##### 活動

以下の手順をもって進められた。

- 話の共有
- 認識と文化
- ソフト・パワーと文化外交
- 多文化主義
- 異文化間対話：フィッシュボール・シミュレーションはじめに、PYは自国の紙幣を用いた自国文化の紹介をした。紙幣にある文化的な図画から自国について話をするのは挑戦であった。

次に、認識と文化について、どのように我々の独特な

社会化が異文化に対する偏見や見方、認識を生むのかの議論を行った。PYは違う角度から真に異文化を見ることができるよう、自らの認識に批判的でなければならなかった。

そして、ソフト・パワーについて取り上げた。というのも、これは宣伝工作や文化帝国主義に用いられ得るものであり、ソフト・パワーであっても、力の行使であることに違いはないからである。文化は武器にもなり得るのだ。PYはソフト・パワーについての国際連合ウィーン事務局の報告書について議論し、「ソフト・パワーは垂直的で目立つたためのもので、文化外交は水平的で面を取るためのものである」という点を強調した。これが、ソフト・パワーを人間味あるものとして捉え、対話の役割が肝要と考えられるようになる土台とした。

その後、ソフト・パワーや青年の民間外交に関する手法や方策に移行した。注目したのは、異文化理解のための二大要素である多文化主義と対話である。

多文化主義については、いかにしてより共生的で多様性に根差した社会や社会同士の関係を作り上げることができるか議論した。そして、4D（服飾のDress、食事のDiet、舞踊のDance、方言のDialects）を超えた多文化主義への道程について考えさせ、以下のような質問に繋がった。自分のコミュニティや社会において多文化主義や共生の度合はどの程度であるか。これまで自分が自分のコミュニティや社会において疎外感を覚えたことはあるか。これまで以上に異文化に対し受容的となるために、青年のリーダーが踏むべき具体的な手順とは何か。

次に、対話について考えるため、このセッションでは日本とASEANの青年が直面する問題についての個人対個人による対話の場を設けた。PYは、フィッシュボール・モデルを用いて対話に参加した。フィッシュボール・モデルとは、内円（対話当事者）と外円（傍観者）に分かれて行われる対話形式である。第1回にてPYが見出した問題を用いて、内円にはPYの希望者が座った。取り上げた問題とは、いじめについてであった。

ファシリテーターが対話のルールを設定し、傾聴、尊重、秘匿性を強調した。これは、コベナント・オブ・プレゼンス（誓約）やチャタム・ハウス・ルールに着想を得たものである。PYはいじめに関する自らの見方や経験について共有し、とても感情的でありながら力強い空間となった。というのも、この対話が極めて個人的な世界を開かせ、他のPYが最も正直な状態を目の当たりにさせたからである。異なる文化に属しながらも、PYが互いに肯定し合い、披露した困難について認識したことでこのセッションは締めくくられた。

#### 成果

- ソフト・パワーの正と負の側面についてより鋭くとらえることができるようになった。

- ソフト・パワーによってより良い公平なコミュニティを作り上げる手立てを見出した。これには、文化外交の手法も含まれる。
- 多文化主義や対話が自国においてどう用いられているか現状に向き合った。
- 個人のレベルにおける対話の力というのを理解した。
- 真の異文化間対話に必要なコミュニケーション能力を養った。

#### グループ・ディスカッションIII

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- 日本とASEAN各国において、ソフト・パワーと民間外交が用いられた様々な事例について知る。
- ソフト・パワーと民間外交を用いた異なる取組を促進または妨害するものは何か見出す。
- 自分の国がソフト・パワーと民間外交を推し進める上でふさわしい活動にはどのようなものがあり得るか考える。

##### 活動

PYの要望を受けて、過去2日間での学びを消化することから始まった。どの学びが最も印象に残ったかを尋ねたところ、最も多い回答は次のとおりだった。

- 物語形式による伝え方
- ソフト・パワーと文化外交
- 対話
- コベナント・オブ・プレゼンス

その後、討論の場に移り、各国から持ち寄った取組事例のプレゼンテーションを通じてソフト・パワーと民間外交について考えを話し合った。（国別課題b.のとおり）ビデオやポスターを用いて事例が紹介されたが、実際にPYが関わっていたものをいくつか以下に取り上げる。ブルネイ：ブルネイNLが関わっている、バングラデシュのcockspazaruにおける難民や、カンボジアにおける少数派のイスラーム教徒に対する人道的連携シンガポール：スポーツ、武術、国際交流その他に注力するPYによる取組

インドネシア：相乗りや運送に関する技術

マレーシア：異文化、特に少数民族について知るプロジェクト

日本及びミャンマー：日本とミャンマーのPYが関与している教育の国際交流

フィリピン：フランス・フィリピン間の文化交流

カンボジア：プノンベンで英語を教える外国人へのインタビュー

ラオス：PYが関わったことのある、別の国際交流プログラムについてのインタビュー

ベトナム：環境とメディアについてのプログラム

タイ：バンコクでの文化イベント

他国でどのようなことが行われたかを目の当たりにし、自国の文化や文脈には、ソフト・パワーと民間外交についてどのような活動がふさわしく実現可能かを考えた。これは、「日本とASEANにおいては、ソフト・パワーと民間外交についてのどのような活動が有効で、何が有効ではないか」という質問につながった。

#### 成果

- ソフト・パワーと民間外交に関したプロジェクトを推し進める上での想定していなかった種々の可能性を知ることができた。
- ソフト・パワーと民間外交を成功裏に用いる上で、促進する要素と妨害する要素、範囲、そしてどのような取組が必要になるかを見出した。
- ソフト・パワーと民間外交を用いた事後活動の候補について青写真を描きはじめた。

#### グループ・ディスカッションIV

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- ソフト・パワーを発揮し、日本とASEANにおける民間外交を推し進める上での個人的、制度的、文化的障壁に詳しくなる。
- ソフト・パワーと民間外交を用いた活動を広げる上で個人的、制度的、文化的に立ちほだかる壁を乗り越えるための手法や戦略を見出すことができる。

##### 活動

このセッションは、以下の質問を受けた話の共有から始まった。「自国を心から誇りに思った瞬間と、誇りに思わなかった瞬間を思い出して、紹介してください。」

これに続いて、異文化間の理解や関係性を促したまたは妨げるような、個人的、制度的、文化的要素の間に存在する複雑な関係性（態度のAttitude、行動のBehavior、文脈のContextから、ABCトライアングル・モデルと呼ぶ）が紹介された。PYは小さな班ごとに分かれ、ソフト・パワーを発揮し、民間外交を成功に導く上での障壁を取り除くための話し合いと、その手立ての分析を行った。それは「何が、ソフト・パワーによる手法と民間外交を十分に活用することを（個人的、制度的、文化的に）妨げているのか。それに対して、青年のリーダーとして我々には何ができるか。」という質問につながっていった。そして班ごとの結論が、全体に共有された。

#### 成果

- PYは、自らの文化に対する感謝や認識が足りないことが、政策や政府の事業における文化や芸術の優先度が最低であることに表れていると指摘した。
- 資源、技術、整備されていないメディア基盤や文化的事業者や芸術家への支援の欠如が、ソフト・パワーと民間外交を発揮する上での大きな障壁となっ

ている。

- こうした障壁を踏まえ、自分たちの個人的な人脈や呼び掛けによって、ソフト・パワーや民間外交に関する活動を創り上げることができると考えるに至った。

#### ブルネイでの課題別視察

施設：文化青年スポーツ省歴史センター、言語・文学局

##### 活動

ブルネイでは、文化青年スポーツ省歴史センター及び言語・文学局を訪れた。

歴史センターでは、ブルネイの独立、植民地化前の歴史、植民地時代の貿易、他のアジアとの関係と続く異なるセクションを案内していただいた。その後、言語・文学局を訪問し、局長とお会いした。局長の主導で簡単なワークショップを行い、PYは班ごとに分かれ、ソフト・パワーや文化の活用について考えを話し合った。局長によれば、ブルネイの独特なソフト・パワーとは、国の運営において平和的なイスラーム信仰を礎としていることであった。

##### 視察から学んだこと

- ブルネイの歴史的背景、独立までの道程、アジアや旧宗主国との関係についてより詳しくなった。
- ブルネイの文化保護や一般への広報に関する仕事について理解することができた。

#### グループ・ディスカッションV

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- ソフト・パワーと民間外交に関する社会貢献活動を企画・実行する自信を深める。
- 日本とASEANのためのソフト・パワーと民間外交に関する社会貢献活動についての非常に良い考えを自ら明確に伝え、共創することができる。

##### 活動

2名一組となって、（個人課題b.にて）外国人から褒められた自国文化の良い点について共有することから始まった。これによって、外国を惹きつけるような文化的な強みとは何か明らかになった。続いて、ブルネイでの課題別視察の振り返りが行われた。PYは歴史センターに対して満足していたが、以下のような発言もあった。案内係の方がより自発的に説明や資料の共有をしていただければ更に有意義となった。言語・文学局でのワークショップは歴史センターでもできる内容のものであったので、時間の観点からは、街の離れた場所にある言語・文学局に移動するよりも歴史センターへの滞在にもっと時間を割いた方が良かったのではないかと。もしくは、言語・文学局に滞在して、そこでの取組を見ることができれば良かった。

このセッションの時間の半分は、国ごとにPYがソフト・パワーの発揮と民間外交の推進に関した社会貢献活動を企画することに費やされた。その際、ひな形を用いて、以下のような情報が盛り込まれた。

- なぜその活動が必要だと考えるか。
- これにより、何を達成したいか。
- 具体的にどのような行動を考えているか。
- 評価はどのように行うのか。

そして、PYは、提案した考えに対してのフィードバックを受けることができた。

最後に、社会貢献活動を実行する上で有効となる各PYの強みや前向きな要素を確認することでこのセッションを締めくくった。

#### 成果

- ソフト・パワーと民間外交を学ぶことに関した本国で行う社会プロジェクトについて、土台となる考えをまとめた。
- フィードバックや振り返りを通して、社会貢献についての考えを深めた。
- 健康、教育、障害者についてのプロジェクトにおいても、民間外交やソフト・パワーに使われた手法を応用した。

#### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

##### ねらい

セッションの終わりに得られているものは、次のとおりである。

- DG7での主な学びを消化し、発表に向けてまとまりのある内容に落とし込む。
- 全てのPYや「東南アジア青年の船」事業の関係者に対して学びを共有するための創意に富んだ手法を編み出す。

##### 活動

(1) DG7による発表の技術面を担う、(2) 内容についてどう表現するか創意工夫を行う、ことを焦点とした2つのプレゼンテーション・チームを組成すると決めた。

各チームとも発表について検討し合い、全体に対して共有を行った。互いのフィードバックの後、発表者、ステージ管理、視覚資料、脚本など主要な担当が決められた。

##### 成果

発表の軸として「DG7で学んだ7つのこと」を押し出すことを決定した。それらは、次のとおりである。

1. ソフト・パワーと文化外交（垂直的と水平的）
2. 物語形式による伝え方（民間外交）
3. 文化の氷山モデル
4. 文化の差異を乗り越える（ABC分析）
5. ソフト・パワーと民間外交に向けて：多文化主義
6. ソフト・パワーと民間外交に向けて：対話
7. 信頼と関係性の醸成

それぞれについて、当初より思案された事後活動や予定している活動のどれが当てはまるのか、適合させることに決めた。こうした予定する行動は図画でも表され、DGの発表に際して配布された。

発表では、DG7における全ての学びの基礎として用いられた手法（「コベナント・オブ・プレゼンス」、安全で成長できる場、個人の経験談へ重きを置く）についても強調された。発表ではさらに、ミュージカル「ウィケッド」で使われる「あなたを忘れない（For Good）」という曲を用いることで、このDGで学んだことの意味が表現された。

#### D. 決意・期待される今後の活動

今後の活動についての議論は、DGの5日目に事業終了後に何ができるか話し合う中で行われた。引き続きプロジェクト・マネジメントの実践演習の時間でも議論され、そこではPYに対して将来の計画についてより詳述し、事業提案書にまとめることが求められた。

各国ごとの概要は次のとおりである。

##### 【カンボジア】

事業名：The Crane Project

課題：カンボジアでは子供の癌についての取組や認知が限定的である。

##### 解決策：

- カンボジアにおける癌患者、家族、ボランティアの青年の相互理解のためのプラットフォームを作る。
- 患者、家族、友人に対して、自ら直面している状況や問題について共有するよう促す。

理由：カンボジアでの癌患者支援を促進することに貢献したい。

##### 【日本】

事業名：Promoting International Friendship through SSEAYP

課題：日本の青年における文化的多様性に対する認識の欠如

解決策：「東南アジア青年の船」事業やASEANの国々について、学校でワークショップを開催する。

##### 理由：

- 日本人の文化的多様性に対する需要度合を向上させたい。
- ASEANの国々についての理解を深めたい。

##### 【タイ】

事業名：Thailand Zero Enemy Hundred Friend

課題：首都や大都市の青年の間では、タイ文化の大切さや多様性があまり認識されていない。

解決策：トレーニング・ワークショップや文化に関するフェスティバルを開催し、タイの若者に自らの文化に対して理解を深めてもらう。

##### 理由：

- 若者はタイを代表して、タイ文化への理解を広げたり、ブランドや製品を作ったりすることができる。
- 物語形式の伝え方によって、文化や製品自体がより興味深く、理解されやすくなる。

##### 【ミャンマー】

事業名：Life in Yangon（ヤンゴンでの各種民族の若者に向けたフェスティバル）

課題：ゲッター化。ヤンゴンでは異なる民族コミュニティ間でのつながりやコミュニケーションが弱い。

##### 解決策：

- 青年の交流事業（ヤンゴンに居住する各種民族の若者同士による、形式ばらずに開かれた対話を行う）
- セミナーやワークショップを行う。

理由：ヤンゴン青年の間での社会的まとまりや平和的な環境を促進させたい。

##### 【ベトナム】

事業名：Embracing Beauties

課題：障害を持つ方々が取り残され、経済的にも文化的にも機会に乏しく、社会に参加することが容易でない。

解決策：障害を持つ方々によって制作されたファッションを用いて、その才能に目を向けさせ、その置かれた状況について一般の認知度を上げる。

理由：ベトナムにおける障害を持つ方々に対する一般の認知を上げたい。

##### 【インドネシア】

事業名：Children Stories Written by Children

課題：インドネシアの農村地域における教育問題が政府に見過ごされている。

課題：特に農村地域や郊外の生徒から、普段の生活についての話を集め、それを書いてもらい、本として出版する。

##### 理由：

- 教育関係者に働きかけ、当局に見過ごされているインドネシアの教育問題について対処してもらいたい。
- 農村地域の生徒に、読解力を磨き、夢を追いかけ、もっと誇りを持ってもらう動機付けをしたい。

##### 【ラオス】

事業名：Bring Local to Global Laos is Asia

##### 課題：

- ラオスの隠れた美しい文化、地元の織物、手芸品、食べ物、自然についてはあまり知られておらず、人々の目に触れる機会がより必要である。
- ラオスの県は経済発展の度合が低く、産品があまり知られていない。

解決策：文化についてのワークショップやトレーニングをラオスの若者向けに開催し、文化的な産品や経験の持つ価値を認識してもらう。

##### 理由：

- ラオスの美しさを見せたい。

- ラオスへの訪問者を増やしたい。
- 自らの文化に対する認識を強め、地元でもっと費やすようにしてもらいたい。
- 青年がもっと自信をつけて自らの文化を広めてほしい。

##### 【フィリピン】

事業名：Home of Living Traditions

課題：いかに先住民のコミュニティが自らの文化を広められるようにするか。

##### 解決策：

- 先住民とそうでない者混成で、深く交流ができる青年キャンプを開催する。
- ミンダナオの先住民青年に自らの文化を物語る術を教える。

理由：先住民青年に自らの文化に対して理解を深め、もっと良さを分かってもらいたい。

##### 【ブルネイ】

事業名：LEGASIKAMI, SSEAYP Festival

課題：国際交流事業への青年の参加が芳しくない。

解決策：「東南アジア青年の船」事業のような青年交流に関する、娯楽や慈善の要素も持った祭典を開く。

理由：交流事業について触れさせ、娯楽や慈善を通じてブルネイ国民の啓蒙を図りたい。

##### 【シンガポール】

事業名：#SimiCMIO

課題：中国系、マレー系、インド系、その他（CMIO）の存在により多文化主義が狭く定義されている。

解決策：シンガポールの祖先について短編映画を作成し、より深い会話への橋渡しとする。

##### 理由：

- 多文化主義は4D（服飾のDress、食事のDiet、舞踊のDance、方言のDialects）を超えた概念である。
- 価値体系や家族の声、偏見など、文化のより見えない側面について考えを深めてもらいたい。

##### 【マレーシア】

事業名：Going Native, #BeAsli

##### 課題：

- ほとんどのマレーシア国民がオラン・アスリ先住民族に対して偏見を持っている。
- オラン・アスリがその豊かな文化を保存しようとしているが、その文化に対する認知が都市部ではまだまだである。

##### 解決策：

- ワorkshopを開き、オラン・アスリのコミュニティとの対話を行う。
- オラン・アスリの青年たちに対してソフト・スキルの訓練を行い、もっと自信を持ってもらう。

##### 理由：

- オラン・アスリにもっと自信を持って、自らの文化を広めてもらいたい。

- マレーシア人がオラン・アスリの文化に対して持つ偏見を減らしたい。

#### E. 評価・反省（自己評価セッション）

評価は、次の2種類について行われた。(1) DGに対する一人ひとりの目標に焦点を当てた個人的評価。(2) DGの中身や過程に対するプログラムの評価。

PYは個人の目標を振り返り、達成できたかどうかを確認した。そのための時間が与えられ、2名一組となり話を共有した。これには個人的な話を含むので、全体への共有は求めなかったが、何名かは自発的に自らの考えについて話してくれ、それらは次のようなものであった。

- DGは知的な活動の場というだけでなく、真の友情を築けたことから、何名かにとっては、SGのような場となった。
- ソフト・パワーと民間外交は自国において注目されるようなテーマではなく、教室でもそのような話題は減多にない。しかし、人と人を結び付ける上で、これらがどれほどの力を秘めているかを理解することができた。
- GiFTにて明らかになったとおり、課題別視察の受入れ側がソフト・パワーや民間外交の概念に精通していれば、より一層良いものになる余地があった。PYの学びの状態により合致する内容であれば更に良かった。
- 個人的な話と語りには力があり、DGにおいて物を語り続けることは思考を巡らし、教訓を見出す際に有用であり、これはDGのテーマに限らず人生の選択やキャリア、価値観についても当てはまる。
- PYにとって、DGはにっぽん丸の中で「ありのままの自分」でいられることを公式に許された場となった。PYでいることは常に「国の代表」としての自覚を持たねばならない負担を背負い、精神衛生上も負荷がかかったことから、この場がとても大事になった。DGでは、自国や自国政府に見られる課題や問題を正当化しなければならないという圧力もないため、他者の目を気にせず皆がより正直に話をするのであった。「PYである前に、一人の人間である」という考えは救いとなり、PYを落ち着かせDG内でより純粋で心のこもった交流をもたらし一助となった。
- 全ての学びの中で、PYにとって最も重要なように映ったのは物語形式による伝え方と、様々な種類の行動における対話であった。それは、互いをより深く理解することが求められる際には何事に対しても応用可能であるからである。

#### F. ファシリテーター所感

##### DGの誕生と、適切なレンズを求めて

ソフト・パワーと青年の民間外交というのは、第45

回「東南アジア青年の船」事業のDGの中で最も新しいテーマであった。90年代にジョセフ・ナイが理論化した国際関係論の広いキャンパスを基に、異文化コミュニケーションの枠組みにも合うように、DGテーマの扱う範囲設定を狭める作業は、2018年8月に私の初めての計画書が承認されるまで、推敲の連続であった。これでひと段落と思いきや、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいてPYと会い、その経験、準備度合、情熱、信念を知った際、私は設計を再調整せざるを得なかった。

苦心した点は、何がDGにとって適切なレンズと手法であるかを見つけることであった。というのも、事実、議論はどの方向にも進み得るわけで、多方面に関係してくるからである。私は平和構築者のような手法をとるきらいがあり、これこそが私の精通している分野である。ここでは、ソフト・パワーや民間外交を宣伝工作や他国の文化面を乗っ取りに用いるのではなく、「他者」の偏見や固定観念を破るべく、真の、草の根の、出会いを創り上げるために用いているのである。

これこそ、文化外交が本領を発揮する点である。結局はソフト・パワーも力の行使であることに変わりはなく、他の文化、特に少数派を虐げる武器となり得る。このDGではソフト・パワーを「垂直的」であり、文化外交を「水平的」であるとする考え方を堅持した。

これらを踏まえ、物語形式による伝え方が本命の手法となった。平和構築者として私はこれがどれだけ効果的かを目の当たりにしてきた。対立状態では特にである。対立する当事者が問題について全く譲らずの一点張りではなく、ただ胸を開いて自分たちの話をするのである。DGでは毎回、冒頭で物語ることから始まった。PYは実体験や個人的な経験談から自分たちの文化の持つ側面について話をするよう求められた。にっぽん丸の船内で送る慌ただしい生活の中で、他のPYの話を深くまで聴き、また聴く耳を持ってもらうというのは得難いためPYはとても気に入ってくれて、この手法は有用であった。話によって真に力が引き出されるためには、安全に感じられる場所が必要である

PYにとって、包み隠さず真に自分の話をするには、DGにおいて安心できる場所が必要となるのは明らかであった。腹を割った話をするには、国を代表して来た「民間大使」であるという肩の荷を幾ばくか降ろす必要があり、そこでは一般的でない意見を支持しようが、自国の文化が押し出す政治上、社会上、経済上、安全保障上の方針について批判的であろうと、そこから何らかの悪影響が及ぶことを恐れなくて済むのだ。

DG内での規則を作るよりも、「コベナント・オブ・プレゼンス」を採用した。PYは互いにより円滑に物語る上で、その精神が持つ最も重要な原則を取り入れた。大げさなくらい受け入れる姿勢、修正をさせない、無理

矢理喋らせることをしない、辛抱強く傾聴する、決めつけをしない、などである。

「東南アジア青年の船」事業において、このような肩の力を抜いて安心できる空間は非常に大事であることが分かった。というのも、セッションを重ねるごとに、DGは唯一（国の代弁者でなく）ありのままの自分でいられ、耳を傾けてもらえる特別な場所だという声が出てきたからである。こうした思いが最も表れたのは、自主活動「サンセット・カンパセーション」においてであろう。ここでは、何人かのPYに声をかけて、夕暮れの中、甲板で深い会話の機会を提供した。これはとても好評で、インフルエンザの流行により中断させられたものの、参加者からは喜びの声が寄せられた。

評価を行う時間では、DGで最も有意義だった会話の一つはIrene Butterの「あなたが話を聴かなかった相手が、敵となる」という引用に基づくものであったとは、多くの者の言である。

##### ますます真剣に取り組まれるようになったディスカッション活動

ファシリテーターを拝命したのは2回目だったが、本年度、内閣府が求めたDGの本格度はこれまでにない水準のものであり、驚いた。東京でのファシリテーター会議までのフィードバックやコメントは、私が学術の世界で通常接する査読のようであった。個人的には、この変化を歓迎している。というのも、実際に「東南アジア青年の船」事業は長らく文化交流にとどまっていたが、深い学びや青年人材の育成、日本とASEANの将来を形作るための意見交換を行う実験の場であるのだ。その結果として、宿題はより本格的で課題図書も増え、取り扱う資料は更に複雑なものとなった。

しかしながら、こうした新しい装いも出航前研修において完全にはもたらされなかった。悲しいことに、NPに比べて低い位置づけや優先順位に甘んじていたと知ったのである。PYの中で、口八丁でなんとか表面的にDGをやり過ごすとか、DGはつまらないと思われているとか、船に乗ってから課題をやるだとかと話すのを耳にするのは珍しくはなかった。DGの学びは乗船の遙か前より始まるべきであることを考えずに「勉強にきました」と話す者もいた。

実に考え抜かれた課題を提出してくる参加国もあれば、事業が始まってからやっつけ仕事で事前課題や課題図書をごまかすところもあった。他のファシリテーターに照会したところ、全く提出しなかったという者も存在していた。

全DGを通して、こうしたことは議論の質に影響した。最初の2回については、取り上げる題材のほとんど

が各問題点に対応していたので殊更であった。当初計画よりも議論の幅を狭めなければならず歯がゆい思いをし、副題の盛り込み方を変更した。最後には帳尻を合わせて綺麗にまとめることができるとは思ったものの、やはりもっと盛大に議論を喚起したかった。というのも、PYの賢さを考えると、やればできるのだから。実によく準備してきたPYからは、どうして若干の足踏みをするかを選んだのか、終わりが近づくにつれて尋ねられ、それに対しては、40名のグループを前提にすると、全員の学びについて責任を持たなければと思っていて、残念ながら前に進むとついていけない者が出てきかねないのだと答えた。

##### 心からつながりたいという気持ち

約15年のファシリテーター経験から思うのは、「東南アジア青年の船」事業を稀有な場にたらしめているのは、DGでの学びにおいて、全体を通じて学習と友情が等しく目標とされるような過程を創り上げなければならないという挑戦である。ただ単なる「リーダーシップのかん養」や「スキルや人格面の育成」とは相いれない性質を持ち合わせているのだ。DGはまず何より、友情と親善の場であるべきだ。ファシリテーターの表情に喜びや情熱を見て、純粋にそのやり取りを楽しんでいると感じて、はじめて、PYはDGという場を信頼するものだと思える。完璧からは程遠かったが、PYがDGという場を委ねる上で、私を信頼してくれたと心から感じることができた。言うまでもないことだが、PYが信頼してはじめて、真に安全に個人の体験の根本にある痛みや喜び、恐れや希望といったところまで着地することができるのであり、対話のセッションにおいては特にそうである。この地ならしができた後、PYはこの日頃の「体験を語る」時間を楽しみにするようになった。私は何度もPYが互いに抱き合いたたえ合うのを目にした。こうした関係性があってこそ、とても技術的な議論（プロジェクト・マネジメント、分析、提案など）もこなすことができたのだ。つまらなく飽きてしまうような課題を与えた時でさえも減多に退屈そうな表情を目にすることはなかったが、それはおそらくPYが「友達」と一緒にやっていたからであろう。

実際、PYに対してDGの知的な話題にとらわれることなく交流させたところ、より良い関係性が生まれた。

最後に、DG7の雰囲気がうまく伝わるようなものを自分たちのシャツに印字しようとした際に使った、Chris Spiesからの引用を以て私のまとめの言葉としたい。「私と一緒に私の川まで歩み、その水を口にすることで、本当の私など理解することはできない。」



## (B) 手頃で信頼でき持続可能なエネルギーの利用グループ

PY：35名

### A. グループ・テーマ・インフォメーション

#### a. テーマの概要

- 日本及びASEAN各国を取り巻く今日のエネルギー事情について認識し、その上で、すべての人が手頃で信頼できる持続可能なエネルギーの利用ができるような社会に向けて青年はどのような貢献ができるかを議論する。

- 1) エネルギーの定義、2) 各国のエネルギー源 3) (日本及びASEANの) 国の要件、できることや能力、4) エネルギーの生産と需要、5) アイディアの実行や実施、6) エネルギー利用における青年の責任や役割について理解する。

#### b. 期待される成果

- エネルギーのタイプについて理解する。
- 社会のためのエネルギーの用途や利便性について理解する。
- エネルギーを生み出し、作る過程について知る。
- 結果や結論を自信をもって発表できるようになる。
- 国家の発展にとってのエネルギーの重要性を理解する。
- エネルギーの維持管理についてや、エネルギー効率を求める理由について意識する。
- 持続可能なエネルギーや再生可能エネルギーの便益について関心を持つ。

#### c. 身につく能力

##### 知識

- エネルギーが国の成長にどう資するのか
- 日常生活におけるエネルギーの使用について
- 日本及びASEANにおけるエネルギーとその環境への影響
- 誰がエネルギーから利するのか

##### スキル

- PY間のコミュニケーション能力をかん養する
- 良案を生み出し考えつづることができるようになる

### B. 事前課題

#### 個人課題 1

- SWOT分析
- ITや各種道具や手段を用いる能力
- 個人及びチームで働く際に何が求められるか理解する
- 結果を発表するにあたっての自発性
- 聴衆を相手にする方法や他のPYへの丁寧な接し方
- PY間でいじめのないようにする
- 自尊心と他者の意見や考えへの尊重

#### 個人課題 2

再生可能エネルギーやそうでないエネルギーに対する理解について議論に備えること。エネルギーはどのような形態をするのか。特定のエネルギーの長所と短所とは。エネルギーの変換に対する理解は。最も多く生産されているエネルギーのタイプとは、最も利用可能で消費されているエネルギーのタイプとは。

#### 個人課題 3

再生可能エネルギーが国に重要な役割を果たすのかという議論に備えること。今日、仮にエネルギーが限定的もしくは皆無であった場合、何が起きるだろうか。どのような日常生活への影響があるだろうか。再生可能エネルギーに対して前向きに考えているか。再生可能エネルギー以外の選択肢を青年は持っているか。

#### 個人課題 4

自国の今日のエネルギー事情について議論に備えること。エネルギーの需要はどうなっているか。エネルギーの経済的、社会的、文化的もしくは政治的影響はどのようなものか。

#### 個人課題 5

日本及びASEANにおけるエネルギーの未来とはどのようなものとなるか議論に備えること。日本及びASEANはその供給をきっちり確保できているか。需要に見合う

供給を得られているか。エネルギーを取り巻く将来の課題とは何か。政治的、社会的、文化的、環境的観点から考えを述べる。日本とASEANの間で、何らかの協働や取組が存在しているだろうか。将来、エネルギーへの支出は現状よりも手頃なものとなるだろうか。

#### 個人課題 5

エネルギーのエコシステムにおいて誰が組み込まれているかという議論に備えること。青年は其中で利害関係者として数えられるべきか。その中で青年はどのような貢献ができるか。その中でNGOやメディアはどのような役割を担うか。

#### 国別課題 1

自国では人々が手頃で信頼できる持続可能なエネルギーの利用ができていくか分かるように準備しておくこと。自国の状況を踏まえて、どうすればそれが達成できるだろうか。そして、それはどのように実行されればよいだろうか。エネルギーが利用できるようにするのは政府の責任なのであろうか。

#### 国別課題 2

自国に好ましいエネルギーのタイプについて発表し、その理由も述べる。そのエネルギーが、費用面や税金なども考慮するとどうして手頃だと言えるのか。そのエネルギーは経済的、社会的、文化的にどのように影響をもたらすのであろうか。化石燃料が望ましいとした場合は、その理由を述べる。化石燃料以外を選んだ場合は、化石燃料よりも優れている理由を述べる。日本とASEANにおける再生可能エネルギーの可能性についてどう理解しているか、またどのような便益をもたらすか述べる。

#### 国別課題 3

自国におけるエネルギーの輸送や移動に関して自分たちの理解を発表すること。それらは陸海空を含むものか。陸であれば、地下であるか地上であるか。どのような輸送手段が望ましいか。利点について議論すること。

#### 国別課題 4

エネルギーの産出に関し日本とASEANで直面している課題について発表すること。自国政府は持続可能な開発計画を持っているだろうか。政府計画は経済、社会、文化活動に対してどのような影響をもたらしているだろうか。化石燃料への依存を減らし、再生可能エネルギーへ投資する計画を政府はもっているだろうか。再生可能エネルギーや持続可能なエネルギーについての自国の戦略や政策について議論すること。その戦略の経済的、社会的、文化的な影響はどのようなものだろうか。環境面での課題は何か。これについて、青年はどのように関与しているか。

### C. 活動内容

#### 日本での課題別視察

施設：千葉商科大学

#### 活動

- 千葉商科大学の紹介と、本学がいかにか太陽光パネルを電力源かつ収入源として運用しているかについての革新的な考え方の説明をいただいた。
- 屋上に行って、施設内の電力消費をまかなう太陽光パネルを見て、太陽光パネル由来の電力消費について過去の統計や用途を見せていただいた。
- 講師と発表者の方との質疑応答。
- 本学学生によるエネルギーに関する意識喚起についての発表。

#### 視察から学んだこと

- 本学は日本初の全てを再生可能エネルギーによって賄うことを目指すという興味深い考えを標榜している。
- 日々の活動にとって、エネルギーがいかに大事かを学んだ。特に次世代でも使える再生可能エネルギーは環境負荷が小さく、人類や生物にとって有益である。
- 地元青年による自らの活動についての発表は非常に興味深いものだった。青年には社会における自分達の役割を世に示す機会があるということが分かり、見習う上で極めて有用な事例であった。

#### グループ・ディスカッション I

##### ねらい

- DG8のテーマ名についての定義やエネルギー関連について理解をする。
- 異なるタイプのエネルギーや、変換の過程がどのように起きるかを識別できるようになる。

##### 活動

- ファシリテーターによる概要説明
- 参加国ごとに、題目についての定義を自国の状況に照らして発表する。
- 持続可能なエネルギーとそうでないエネルギーについて小さな班に分かれて議論し、その結論を発表する。

##### 成果

- 様々な参加国による発表から、題目の定義について理解することができた。他の話題に移る前に定義を押さえておくことが肝要である。
- 再生可能エネルギーとそうでないエネルギーをどちらも含んだエネルギーごとの長所や短所について議論し、PYはこれらを判別することができるようになった。
- エネルギーの取り得る形態についてPYは理解することができ、それらは以下のように様々である。
  - 動くことによって生じるエネルギー（運動エネルギー）
  - 蓄積されるエネルギー（位置エネルギー）

- ・ 聴くことのできるエネルギー（音エネルギー）
- ・ 目によって察知することができるエネルギー（光エネルギー）

### グループ・ディスカッションII

#### ねらい

- エネルギーの便益と重要性について理解する。
- 経済、社会、文化に関係するような手頃で信頼できる持続可能なエネルギーとは何かを見出し、理解する。

#### 活動

- ファシリテーターによる発表
- 自国の経済、社会、文化に関連する手頃で信頼できる持続可能なエネルギーの利用と望ましいエネルギー源について、参加国ごとに発表する。
- エネルギーの便益と重要性について班ごとに議論し、発表する。

#### 成果

- 個人課題2に関し班別で議論し、各班ともにエネルギーの重要性や「今日、仮にエネルギーが限定的もしくは皆無であった場合、何が起きるだろうか」という質問について回答した。
- エネルギーの重要性や便益について理解し、以下のように列挙した。
  - ・ 我々の日常生活の土台
  - ・ 生活の質を上げてくれる
  - ・ (1) 経済成長、(2) 社会の発展、(3) 文化の発展、(4) 政治の発展に資する。
  - ・ 経済発展のための主な要件であり、どの国にとっても経済的競争力を支えてくれるものである。
  - ・ エネルギーの生産は雇用を創出する。

### グループ・ディスカッションIII

#### ねらい

- 日本とASEANにおけるエネルギー事情を理解し、共通点と相違点を探る。
- エネルギーの輸送や移動について理解する。

#### 活動

- ファシリテーターによる概要説明
- 小さな班に分かれて、日本とASEANにおけるエネルギー事情について議論し、その結論について発表する。
- 国ごとに、エネルギーの輸送や移動についてどのように考えているか発表する。

#### 成果

- 日本とASEANにおけるエネルギーの重要性について学んだ。エネルギーは、正の経済的、社会的、文化的、環境的発展及び持続可能性をもたらす。
- エネルギーを利用できるようにする上で、その輸送が担う役割は大きい。適切な輸送があってこそ、僻地や農村地帯などでもエネルギーを使えるという便

益を享受できるのだ。

- 現在、エネルギーの利用をできない人口は1億人いるが、このエネルギーへのアクセスについて議論した。この人口を減らすためにはどうすれば良いかについて話し合った。

### グループ・ディスカッションIV

#### ねらい

- エネルギーの影響力や課題とは何かについて認識する。
- 日本とASEANにおけるエネルギーの未来について認識する。

#### 活動

- ファシリテーターによる概要説明
- 自国の再生可能エネルギーに関する戦略について、その課題や影響も含めて、国ごとに発表する。
- 班に分かれて日本とASEANにおけるエネルギーの未来について議論する。これには、持続可能なエネルギーや、安定供給の確保、課題を含む。

#### 成果

- 政府や規制当局による、政策の導入や変更、規制、枠組みが社会に与える影響について理解する。
- エネルギーについての課題、特に再生可能エネルギーについてのものが取り上げられた。解決や対処がされ、人々がそれについて認識するためには、様々な手が打たなければならないということに気が付いた。
- 環境問題もまた一つの大きな課題であり、環境に優しいエネルギー利用についても議論した。PYは、再生可能エネルギーがどうして制度上位置づけられなければならないのか理解した。続いて、気候変動の防止や経済発展、エネルギーへのアクセスやエネルギーの安全保障についても取り上げられた。

### ブルネイでの課題別視察

施設：資源人材開発産業省

#### 活動

- 政府職員による講義
- 5つの班に分かれた上での短い議論と発表
- 質疑応答

#### 視察から学んだこと

- 非常に短時間でいかにコミュニケーションをとり、時間を管理し、様々な聴衆に対して発表するかを学んだ。
- 講義を通じてブルネイの政策や、他のASEAN各国と比較した同国のエネルギー事情について知った。
- ブルネイにおける認知向上のためのプログラムや活動について、学校のクラブや政府職員による講演などの例を交えた情報を得ることができた。

### グループ・ディスカッションV

#### ねらい

- エネルギーと社会がどう結びついているのかという関係性、NGOがどのような役割を担っているのかについて理解する。
- エネルギーの利用について、青年が担う役割を理解する。

#### 活動

- 青年の役割とエネルギーの循環についての、ファシリテーターによる発表。
- 班に分かれてエネルギーの循環や社会、NGO、メディアとの関係について議論。
- 課題別視察（日本及びブルネイ）から得たものや感想について参加国ごとに発表し、議論する。

#### 成果

- 計画の進捗管理や達成に向けた監督と、成果達成のための手法や戦略について理解した。
- 青年は現状の障壁を見極め、立ち向かう能力があり、新しい視点でそれを打破することができる。
- 課題について壮年層が手の届かない情報や知識を直接手にすることができるという利点を青年は持っている。
- 青年はまた、環境や開発に関係する事柄についての調査や出版物について理解することで、大きな貢献をすることができる。
- 地域ごとに点在する、しっかりとした、小規模で、地元密着のNGOが必要を満たすことができるのであり、それらを支援し励ますことが必要である。
- 環境問題についての議論や討論を促進させる。
  - ・ 異なるNGOの役割：保護、予防、普及、変革
  - ・ NGOの目的や目標ごとに異なる役割

### 実践的スキルを用いたグループ・プレゼンテーション

#### ねらい

- 自信を持って、テーマに対する自らの理解や各セッションの目的について発表することができるようになる。
- 議論から得られるアイデアを共有することでチームワークを發揮する。
- パワーポイントによる発表を通じたITの活用によって、PYのスキルや経験を深める。
- 班別の活動に際しては、PY間でのリーダーシップ能力を涵養する。

#### 活動

- 各回につき、1) 個人課題に基づくグループ発表、2) 国別課題に基づくグループ発表、という2部構成で発表を行う。

#### 成果

- PYは各回について全員が発言し発表する機会を与え

られ、プレゼンテーション能力を伸ばし、自信をつける一助となった。

- 全員に対して、各回につき発言し議論する機会が与えられた。

### D. 決意・期待される今後の活動

#### a. 決意

各国から集ったPYの一人ひとりが、エネルギーに関する問題に対して解決策を出す決意をした。各国ともエネルギー消費を最小化し、家庭や施設におけるエネルギーを節約することに資するような活動計画を練り上げた。

#### b. 期待される今後の活動

各国とも、「東南アジア青年の船」事業終了後、活動計画を行動に移すことに向け、プロジェクトを開始するための業務割振りや時間設定を行った。

### E. 評価・反省（自己評価セッション）

- これまでのセッションについて評価するために5つの班に分かれ、各班で成果について議論しまとめることとなった。
- エネルギーの定義やタイプ、利点や欠点について概要をまとめ、タイプの違いや変換についてうまく分けることができた。
- PYは各セッションの目的について、その期待が達成されたことから概ね満足していた。そして、課題別視察の改善点や、より便利で双方向で実践的とするためにセッションを開催する場所について提言を行った。

### F. ファシリテーター所感

本年の事業に選抜されたファシリテーターの一人となることができ、大変光栄であった。このにっぽん丸という船に戻り、日夜にわたって想い出を振り返ることができるのは、全てのPYにとっての夢である。第45回「東南アジア青年の船」事業にDG8のファシリテーターという異なる役割で参加することができたのは、忘れ難い経験となった。

国連の持続可能な開発目標の目標7を受けて、「東南アジア青年の船」事業のディスカッション活動に初めてこのテーマが導入された。これは時宜を得たものであり、手頃で信頼できる持続可能で現代的なエネルギーの利用に向けた諸問題についてPYは更に議論を深め、また広げていくことだろう。

日本とASEANにとって、この事業はPYに企画、解決法、行動要領、実施などについて明確にさせる土台を与える機会となっている。

議論と発表を通して、PYは各国のエネルギー事情について理解することとなった。ほとんどの国が化石燃料に大きく依存しており、再生可能エネルギーによる生産

の割合は小さい。日本及びASEANにおける再生可能エネルギーの持つ可能性は大きい。というも、地理的に各国とも各種エネルギー源に恵まれているのだ。例えば、バイオマス、地熱が挙げられ、他にも赤道に近く年間を通して受ける日光の量を考えると、太陽光発電と風力発電の潜在性がかなり存在する。

ディスカッション・セッションが終わる頃には、PYはエネルギーの循環における青年の役割を理解することができており、異なる背景・異なるコミュニティの者が集ったが、課題が山積する中で皆が未来のリーダーとして自らの主な役割を見出すことができた。現在のリーダー達が協働して、全ての者にとって手頃で持続可能なエネルギー利用を実現させようとしているが、若者も、地球市民として課題に対してより多く学び、行動を起こすことでリーダーシップの役割を果たすことができるのだ。PYは、再生可能エネルギーの促進や効用に関する各国政府やNGOの活動に積極的に加わり、また再生可能エネルギー業界に青年の雇用機会があるようにする必要性を理解した。

セッション中のPYのやる気や協力に対して強い印象を受け、驚いた。発表の準備については特筆すべきで、考えを練る能力とチームワークが発揮され、限られた時間かつ他にやらなければならないこともある中で、素晴



らしい発表を企画できた。

セッション中のPYの興味関心や参加具合から、このDGには将来のファシリテーターにふさわしい者や、各国のどんな組織においてでもリーダー的存在になる者がいることが見て取れた。

末筆ながら、このような素晴らしい機会を与えていただいたことについて、内閣府、ブルネイの国王陛下、BERSATU (SSEAYPインターナショナル・ブルネイ) に対して、心から感謝の念を表したい。また、全ての管理部門、NL、ディスカッション活動運営委員会の運営委員、にっぽん丸乗組員の皆様に対しては、そのご協力と尽きることのないご支援に、御礼申し上げます。

最後に、同僚のファシリテーターであるZain、P-Tor、Budi、Zenn、Ayumi、Evan、Neryについても触れたい。常に伴走してくれ、DGの成功に向けて貢献してくれ、理解してくれたことについて、感謝したい。これまで全ての喜び、笑い声、情熱、笑顔、悲しみやストレスなど、ファシリテーターの想い出としてその一つたりとて消え失せも薄れることもないだろう。一生の友情を結ぶことができた。幸多からんことを、そしてまた皆さんに会える日を夢見て。

ありがとう、#SSEAYPEnergy45。



### 3 帰国報告会（各国事後活動提案）

#### (1) 概要

12月12日、にっぽん丸船内ドルフィンホールにて帰国報告会が開催され、各国事後活動についての活動案を発表し、共有した。PYらは第45回「東南アジア青年の船」事業を通して学んだことを最大限にいかし、社会に貢献していくための第一歩としてこれらの活動案を考案した。

- 16:00-17:15 国ごとの発表
- 17:15-17:30 山谷英之管理官からの報告

#### (2) 各国事後活動提案

##### A. 日本

本プロジェクトは、13～18歳の生徒を対象として、平和について考える機会を提供することを目的とする。日本の地方プログラムにてSG-Jが現地の生徒と経験したセッションに基づき、PYは船上で希望と平和の象徴である折り鶴制作を行った。日本PYはこのプログラムを拡大し、2つの活動を実施する。すなわち、1. 現地の中学校に折り鶴を持参し、2. 平和記念公園に折り鶴を届けること及びPYに手紙を書くことを中学校に依頼する。

プロジェクト名：I am a peace warrior

背景：地方プログラムで岡山県の玉野市立日比中学校を訪問し生徒と交流活動を行った。また、船上で11月28日以下の内容を含む自主活動を行った。

- 千羽鶴についての講義
- 千羽鶴350羽の制作
- 平和へのメッセージ作成

目的：世界平和の促進と相互理解による深い友情の構築に寄与すること

目標：2019年1月末に1,000羽の折り鶴を広島市の平和記念公園に届ける

対象：PY70名と生徒100名

タイムライン：

- 2018年12月～2019年1月：プロジェクトについての映像と写真の共有
- 2018年12月～2019年1月：PYと生徒間の手紙のやりとり
- 2018年12月：ASEAN各国の紹介パネル作成

##### B. ブルネイ

「LEGASIKAMI: A SSEAYP FESTIVAL」は、小プロジェクトのシリーズと2019年12月のフィナーレで成る1年間のプロジェクトである。フェスティバルの目的は、SSEAYPの有益な影響について関心を高めることと、ASEAN各国と日本の文化交流を促進することであ

る。4日間のフェスティバルでは、文化の理解の促進と様々な立場の人の個性の受容に焦点を当てる。

プロジェクト名：LEGASIKAMI: A SSEAYP FESTIVAL

目的：交流プログラムに参加するためにブルネイ青年の質を向上する

- 最低500名の応募者
- 20の非政府組織

目標：

- ブルネイにおけるSSEAYPへの応募者数の増加
- ASEANと日本の文化交流の促進
- 異文化理解の促進
- 現地青年がより積極的になるよう働きかけ、国際プログラムへの関心を育成

内容：

- フェスティバル前
  - 青年を対象とした啓発プログラムと学校でのセミナー
- 主な活動（フェスティバル）
  - 4日間
  - 国際的なパフォーマンス、起業ビレッジ、ASEANと日本の文化交流の展示
- フェスティバル後
  - 啓発、チャリティ活動、持続に向けて継続

社会貢献活動シリーズ：

- Just Check It!
- A Sequel
- Mind Our Minds
- Survivor is no Hero, Survivor is YOU!
- K2E Awareness
- Old but Gold

シリーズの一つであるJust Check It!の目標：

- フェイクニュースと、ソーシャルメディアにおけるその意味合いについて教育し認識を高める

Just Check It!の期待される効果：

- 世界的課題と本当のニュースを理解する青年
- 自身に問うことができ、ニュースを共有する前に批判的に思考できる青年
- 積極的なブルネイ青年

##### C. フィリピン

フィリピンPYは、国内各地でHero in Youthリーダーシップ・サミットを開催する。フィリピンの3,000万人もの青年は、青年対象のプログラム、選挙での投票、社会的団体に参加していない。無関心が拡大している。青

年に関連する課題にも関心がない。

プロジェクト名：Hero in YOUth

課題：青年の関与不足、選挙における投票、青年対象のプログラム、団体活動などにおける青年の関与不足

目的：

- 青年のコミュニティのためにプログラムを企画する潜在力を活性化させる
- 青年リーダーに結果志向の社会プログラムの構築力をつける
- 国造りに必要な活発な青年コミュニティをつくる

目標：

- 3年間の各年に、最低5つのコミュニティから、健康、環境、文化と芸術を主としたワークショップにて研修した150名の青年リーダーを育成する
  - 目標とする数の青年リーダーにSSEAYPを紹介する
- 3年間の活動内容（2019～2021年）**
- 健康：1. メンタル・ヘルス、2. 出産前の健康、3. HIV啓発、4. 健康とウェルネス、5. 献血活動
  - 環境：1. オーガニック農業、2. 棚田の復元、3. マングローブ植樹、4. 環境に関する青年キャンプ
  - 芸術と音楽：1. メディアリテラシー、2. 文化的芸術、歌、ダンス
  - 青年育成：1. リーダーシップ・キャンプ、2. キャリア・オリエンテーション、3. 就職フェア

タイムライン：

2019年4月	ケソン州（ルソン）
6月	リサール州ピナゴナン（ルソン）
8月	ビコール地方（ルソン）
10月	ドゥマゲテ市（ビサヤ）
12月	ダバオ市（ミンダナオ）
2020年2月	タルラック市（ルソン）
4月	イロイロ市（ビサヤ）
6月	マラウィ市（ミンダナオ）
8月	ブキドノン州（ミンダナオ）
10月	ロンブロン州（ルソン）
2021年1月	イフガオ州マヨヤオ（ルソン）
3月	北イロコス州（ルソン）
5月	セブ市（ビサヤ）
7月	コンボステラ・パレー州（ミンダナオ）
9月	マギンダナオ州（ミンダナオ）

資金源：

- フィリピン政府国家青少年委員会
- SSEAYPインターナショナル・フィリピン
- 地方行政組織
- 民間企業
- パートナー機関

期待される成果：

- 最低450名の青年リーダーが以下の状態になる。
- 社会的団体もしくはプログラムに積極的に参加して

いる

- 健康、環境、文化と芸術に関するプロジェクトを先導している
- SSEAYPに関する情報を得て価値を理解している

D. タイ

タイPYの「Goal & Grow」は、タイにおける青年の具体的な人生目標や目標達成のための計画の不明瞭さという課題認識から始まった。これには人生における意思決定の実践経験のなさが影響しているかもしれない。本プロジェクトは、What、How、Confirmを根拠に構築されており、すなわち、何（What）を目標とし、それをどう（How）達成するか、アイデアを実践に移行することで確認（Confirm）する。目標達成のために、第45回SSEAYPにおいて習得したライフスキルを、プロジェクトでの活動にて活用する。

プロジェクト名：Goal & Grow

タイの青年に関する背景：

- 自身の将来について不明瞭
- 目的達成のための計画の欠落
- 必要なライフスキルの不足

対象及び実施場所：

- 高校生50名（16～18歳）
- タイ北部チェンマイ県もしくはタイ南部ナラティワート県（後日確定予定）

目標：

- 生徒は将来設計をするためのツールを身につける
- 生徒は必要なライフスキルを身につける
- 生徒は自信と意思決定能力を構築する

内容：3日間のキャンプ

- 将来設計のためのツール提供
  - 例）生徒に5年計画を考えてもらう
- ライフスキル構築
  - メディア及びインターネット・リテラシー
  - 瞑想
  - 芸術や絵画
  - 起業
  - 高齢化社会シミュレーション

期待される成果：生徒は、人生設計をするための自信や、より良い判断をするためのライフスキルを身につけることにより、ダイナミックな社会において目標に向かって前進できる

タイムライン：

- 船内：初動
- 2018年12月初旬：実施場所の連絡と調査
- 2019年1月：内容決定とキャンプ活動のリハーサル
- 2019年2月第3週：Goal & Grow 3日間キャンプ
- 2019年2月：生徒への質問紙調査及びインタビューの結果分析によるプログラム評価

E. ベトナム

ベトナムPYは、ハノイ市バヴィ県において小中学生を対象に教育プロジェクトを実施する。学校図書館に400冊以上の図書を寄付し、クイズ、朗読、楽しい実験など生徒の読書文化を促進するための活動を行う。各学校の恵まれない生徒のために20個のギフトセットを配布する。

プロジェクト名：Embracing Knowledge

背景：地方の生徒における読書習慣率の低さ

目標：ハノイ市バヴィ県の小中学生における読書習慣の促進

対象：バヴィ県ミンクアン地域の生徒500名

内容：

- ミンクアンB小学校（午前）
  - 学校図書館へ図書の寄付（SSEAYP bookshelf）
  - 生徒にお勧めの本の紹介
- ミンクアン中学校（午後）
  - 学校図書館へ図書の寄付（SSEAYP bookshelf）
  - 科学、英語、異文化理解に関する活動

期待される成果：

- 読書習慣を向上するため、生徒を刺激し、動機づける
- 生徒の読書習慣を維持する
- プロジェクトをベトナムの他の地域に拡大する

タイムライン：

- 2018年12月8日まで：初動
- 2018年12月8～13日：内容の構築
- 2018年12月9～16日：準備とロジスティクス
- 2018年12月17日：プロジェクト実施
- プロジェクト後：評価
- 2019年：他地域へのプロジェクトモデルの拡大

評価及び持続可能性：

- 図書室の司書と毎週連絡を取る
- 本プロジェクトを学校カリキュラムに導入するよう学校を鼓舞する
- SSEAYP bookshelfを確立し、プロジェクトを継続する
- ベトナムの他地方にプロジェクトを拡大する

F. カンボジア

カンボジアにおける小児がんに関する問題の意識向上を図るためのプロジェクト「CRANE For KIDS 1.0」を実施した後、カンボジアPYは、がん治療の専門家の必要性を認識した。そこで、プログラム中の学びを活用し、医学生にこの分野の専門家になることを勧めるため、また経済的困難を抱える家族の子どもに栄養価の高い食べ物を支援するための資金調達をするために、継続プロジェクト「CRANE for KIDS 2.0」を実施する。

プロジェクト名：Crane for Kids 2.0

背景：

- カンボジアにおいて毎年15歳以下の子ども500名ががんを発症している
- 2016年に約200ケースが報告されているが、20%のみの治療が成功している
- 社会貢献活動「CRANE (Cancer Remembrance Appeal for the NEedy) for Kids 1.0」を通して、小児がんの社会認識を向上することができた

目標：

- カンボジアにおける小児がんの理解について社会認識を向上する
- 小児がん治療の専門家となるよう医学生を動機づける
- 経済的支援が必要な家族を支援するために資金を調達する

対象：

- インフルエンサー、著名人、一般人（約300名）
- 医学生（5回生と6回生の学生約400名）
- がんとともに生きる子どもとその家族

内容：

- ソーシャルメディア・キャンペーン
- セミナー（1日）
- 小児がん専門家によるプレゼンテーション
- がんを患う子どもを持つ家族のパネル・ディスカッション

期待される成果：

- イベントに参加した医学生が小児がんの治療を専門にすることに興味を持つ
- 参加者は、小児がんについての認識を向上する
- 家族が経済的な困難に直面している患者が栄養価の高い食べ物の支援を受ける

タイムライン：

- 現在から約2か月間
- イベント実施日：2019年2月14日
  - 2019年1月第1週：初回会議、コアチーム会議
  - 2019年1月第2週：第2回会議:フロア詳細、役割分担、その他の準備
  - 2019年1月第3、4週：ソーシャルメディア・キャンペーンの実施と関連帰還へのアプローチ
  - 2019年2月第1週：実施場所とゲストスピーカーの確定
  - 2019年2月第2週：イベント実施
  - 2019年2月第3、4週：資金配分と評価

評価：セミナー前後に参加者の理解と感想を調査

G. インドネシア

船内でのディスカッション活動の結果、インドネシアPYは、「Remember Me Project」を実施する。インドネシアにおける高齢者数は8,589万人に達し、そのうち約400万人が認知症である。そこで、本プロジェクトは、ワークショップやセミナーを通して若い世代の認

知症に関する認識を向上し社会に役立てるために実施する。さらに、インドネシアPYは、オンラインでより多くのコミュニティに伝えるためソーシャルメディアを活用し積極的にキャンペーンを行う。

**プロジェクト名:** Remember Me Project

**背景:** 現在、407万人の認知症とともに生きる高齢者がおり、インドネシアは認知症患者数においてトップ10に入っている。

**目標:**

- セミナー、ゲーム、その他楽しい活動により知識を共有することで若い世代の認知症に関する認識を向上する
- ソーシャルメディア上のオンライン・キャンペーンを通じてより多くのコミュニティに周知する

**対象:** 青少年 (15~25歳: 高校生、大学生、青少年コミュニティ)

**タイムライン:**

- 短期プロジェクト
  - 2018年12月第3週
  - 高校生30名
  - ジャカルタ
- 長期プロジェクト
  - 2019年通年
  - 青年540名 (各州20名)
  - インドネシアの27州

**内容:**

- オンライン
  - オンライン・キャンペーン  
#remembermeproject  
#leavenoonebehind
- オフライン
  - 高齢者コミュニティへの訪問
  - 認知症に関するセミナー
  - レクリエーション (ゲーム、アイスブレイク等)

**期待される効果:**

- 若い世代は高齢者の認知症予防を支援するために社会で積極的に役割を果たす
- ソーシャルメディア上で認知症に関する啓発キャンペーンを積極的に行う

## H. ラオス

ラオスPYは、「We Care We Share」を立案した。本プロジェクトは、生徒に明るい未来を与えるという目的を継続する。高校生が効果的に大学の専攻やコースを決定できるよう導く。特にラオスで提供されていないが知られていない専攻の認知向上を図る。また、生徒が将来のキャリアに有益な職業能力の重要性を認識することも目指す。

**プロジェクト名:** We Care We Share

**背景:**

- ラオスにおいて、
- 大学には、科学、農業、水資源管理など、多くの興味深く必要な専攻が存在するが、認知されておらず選択する学生も限られている
- 特に新卒の学生における非就業数が高いままである
- 多くの学生が学問以外のスキルが将来のキャリアに有益であることを認識していない

**目的:** 大学のあまり知られていない専攻の認識を向上するとともに、学生自身の持つスキルについての認識を変化させること

**目標:**

- ラオスで提供されている専攻について学生の見識を拡大する
  - ラオスにおいて必要とされているキャリアの重要性を認識するために学生を支援する (例: 科学者、農業分野、環境問題専門家、専門家等)
  - 自身のスキルにより収入を得るよう学生を勇気づける
- 対象:** 高校生 (15~18歳) 145名
- 内容:**
- 特別ゲストによるシェアリング・セッション (様々な分野の大学講師、企業の人事部門)
  - 知られていない専攻についてのワークショップ
  - ラオスPYの個人スキルや、そのスキルによりどう収入を得ているかについての共有

**期待される成果:**

- 大事な専攻を選択する学生の増加
  - 将来の専攻についてより多くの選択肢を認識するよう学生を刺激
  - ラオスにおける能力や可能性のある人材の多様化
- タイムライン:**
- 2019年1~2月: 調査
  - 2019年3~5月: 活動、アジェンダ、プロジェクト広報の確定
  - 2019年6~7月: プロジェクト開始
  - 2019年7~8月: モニタリングと評価

## I. マレーシア

マレーシアPYは、スンガイ・ブローのオラン・アスリ先住民族コミュニティにおいて事後活動を実施する。ミニ図書館を構築し、電気消費を軽減するためにLEDライトを設置する。加えて、村へのリサイクル容器のセットの設置と定期的な回収について調整を行った。

**プロジェクト名:** Going Native #BeAsli

**背景:**

- 多くの人 (特に国際的に) は、先住民族コミュニティが存在することを認識していない
- 先住民族コミュニティは、社会から取り残されがちで、教育へのアクセス、金銭的・経済的包摂などの

基本的ニーズが奪われている場合もある

**目的:**

- マレーシアの先住民族コミュニティを対象とした持続可能なプロジェクトを創造すること
- 先住民族コミュニティの抱える問題に取り組むこと
- 先住民族コミュニティの生活水準を向上すること、対象とする村を他の先住民族コミュニティの先進例とすること

**主な目標・焦点:**

- 質の高い教育  
高等教育の重要性に関する認知向上
- 女性のエンパワメント  
女性の経済社会への包摂
- 衛生に関する意識向上  
リサイクル、清浄度

**対象:** スランゴール州スンガイ・ブローのオラン・アスリ先住民族コミュニティ (高齢者、青年、子ども)

**タイムライン:** 9か月

- 2019年1~3月:
  - 準備及び資金調達のための「SSEAYP RUN」
  - SSEAYP事後活動組織及びマレーシア青年スポーツ省との協働
- 2019年4月:
  - 図書館の改装Library Makeover
  - ハンドクラフト・マーケティング
  - リサイクル容器
  - LED設置
- 2019年5月:
  - キッズニア・プログラム
  - ブック・クラブ (報酬)
- 2019年9月:
  - 評価

## J. ミャンマー

ミャンマーPYの事後活動「GIFTS 45(Green, Information, Friendship, Transportation Safety)」は、社会保障及び環境的影響の認知向上とASEAN各国と日本の友情促進を目的とする。この6か月間のプロジェクトは、マンダレーにおけるゴミ分別に関する啓発、ヤンゴンにおける交通安全、ソーシャルメディア上のフェイクニュース予防と国境なき友人を含むものである。

**プロジェクト名:** GIFTS 45

- GREEN: マンダレー地域におけるゴミ分別の促進
- INFORMATION: ソーシャルメディアに関する高校生と保護者の教育
- FRIENDSHIP: 第45回SSEAYP後に不可欠なコミュニティ拡大
- TRANSPORTATION SAFETY: 高速道路における自動車事故軽減のためシートベルト着用確立

**【GIFTS45の「GREEN」について】**

**背景:**

- マンダレーは、ミャンマー第二の経済都市である
- 人口増加に伴い、ゴミ廃棄量が増加している
- 現地住民においてゴミ分別の認識が欠如している
- ゴミ処理も体系立っていない
- マンダレー地域において、パテインジー地区は人口密度が高い

**目標:**

- ゴミによる害の影響についての認知向上
- 学校における体系立ったゴミ処理ツールの提供
- 「ゴミは金である」のメッセージを高校生に伝達

**対象:**

- 高校生
- 親や保護者
- 先生
- 近隣の住民

**内容:**

- 生徒230名のパテインジー高校においてプロジェクト実施
  - セミナー開催を通じて生ゴミ、ボトル、紙の分別について高校生、保護者、先生の教育
  - 学内に設置するための分別可能なゴミ容器の寄付
  - 分別されたゴミのリサイクル工場への販売
  - 売上は生徒のために活用されるよう学校の基金にする
- タイムライン:**
- 2019年1月: 導入セミナーと分別ゴミ容器の寄付
  - 2019年3月: ゴミ分別とリサイクル工場との関係に関する第1回目評価
  - 2019年5月: ゴミ分別とリサイクル工場との関係に関する第2回目評価
  - 2019年6月: プロジェクトの全体評価

## K. シンガポール

シンガポールPYは、1. 青年と高齢者の世代間理解、2. 健康的なライフスタイル、3. 人種や民族に関する対話を促進することを目指して「Walks of Life」を実施する。シンガポールPYは、青年ボランティアや非営利団体とともに、高齢者と青年ボランティアを歴史的な場所におけるウォークに案内し、両者が対話できるようファシリテートする。青年がより積極的に自主的に高齢者に関わるようになることを成果とする。

**プロジェクト名:** Walks of Life

**背景:**

- シンガポールのコミュニティ意識の薄れ
- 民族間の理解の欠如
- 世代間交流の欠如
- 近隣や名所に関する知識の欠如

**対象:**

- ・ シンガポールの主要3民族の青年と高齢者  
1. 中国系、2. マレー系、3. インド系
- ・ 青年と高齢者が同数の1グループ30名の参加者

**目標：**

- ・ 世代間交流の促進
- ・ 健康的ライフスタイルの促進
- ・ 名所についての教育
- ・ 多文化主義についてのより深い理解の促進

**内容：**

- ・ シンガポールの名所周辺のガイド付きツアー
- ・ 参加者間の社会的交流、文化交流、コミュニティ意識の促進

**【ツアーの一例：チャイナ・タウン】**

**背景：**

- ・ シンガポールにおける文化的意義の深い場所の一つ
- ・ シンガポールを建国したクーリーの故郷
- ・ 宗教や文化が混ざり合う地域（例：スリ・マリアマン寺院）

**実施：**

- ・ 青年と知識の豊富な高齢者がペアになる
- ・ アウトドア活動をしつつ、世代間の知識共有を行う
- ・ ウォークの間、シンガポールPYは多民族及び伝統に関する対話が進むよう手助けする

**タイムライン：**

- ・ 2018年12月～2019年2月：計画と概念化
- ・ 2019年2～4月：参加者の募集
- ・ 2019年4～5月：ロジスティクス確定
- ・ 2019年6月：実施

**評価：**

- ・ プロジェクト実施後の2019年7月に評価
- ・ 評価方法：
  - 質問紙調査による参加者のフィードバック
  - 青年による自主プロジェクトの数